ISSN 2186-2818

明星大学
日本文化学科紀要

第32号　令和6年3月

題目	昭和13年（1938）の英和辞典 ――石川林四郎［編］ 『最新コンサイス英和辞典』三省堂出版――
筆者	古田島洋介

Department of Japanese and Comparative Culture
School of Humanities
no. 32 2024
Bulletin of Meisei University

昭和 13 年（1938）の英和辞典
――石川林四郎［編］『最新コンサイス英和辞典』三省堂出版――

古田島洋介*

平成26年（2014）9月、父が93歳の誕生日を目前にして亡くなり、翌年の正月初めに兄と遺品を整理していたとき、古い小型の英和辞典が見つかった。発条（バネ）の製造会社に勤めていた父が英語を必要としていた話は聞いたことがないので、念のため兄に確認すると、やはり兄が購入した物ではないという。当時なおも存命であった母は、まったく英語ができず、いつでも /f/ 音をハ行で発音していたくらいであるから、とても英和辞典を役立てていたとは思えない。そこで、どうやら父が買った物に違いないと結論を下し、取り敢えず私がもらい受けることになった。ただし、もはや古びた年代物の辞典であるため、父を想い起こすよすがにこそなれ、とても現在の英語学習には役立つまいと、ばらけた本体がなくならないようビニール袋に入れたまま放置していた。

ところが、最近その英和辞典を何気なくビニール袋から取り出してページをめくってみたところ、これがなかなか興味深く、少なくとも日本語の歴史、延いては英語の受容史に関する一資料にはなるだろうとの感触を得た。就いては、この場を借りて、ささやかながらも私が関心を惹かれた点を若干の整理のもとに報告する次第である。小型の辞典とはいえ、英和辞典の部分だけでも冒頭「新語篇」44ページ＋本文1,173ページ＝総計1,217ページに及ぶため、単語・例文などの選定は、あくまで私の恣意または単なる偶然による。周到にして綿密な調査・考察は専門家の後考に委ねることとしたい。

【A】構成

本辞典の詳細な構成は次のとおりである（経年劣化により四つに割れるも、ページの欠損ナシ）。

・表紙（半ば欠損）
・扉
・石川林四郎「緒言」（昭和13年1月付）2ページ
・「凡例」3ページ
・「発音略解」2ページ
・「略語解」（Ⅰ）1ページ　＊品詞・位相・外来語の原語名などの略号。
・「略語解」（Ⅱ）1ページ　＊専門分野の略号。
・「発音記号表」
・森村豊「新語篇ノ序」（昭和22年1月付）2ページ
・「新語篇」44ページ　＊米語すなわちアメリカ英語の新語を採録。

＊　日本文化学科　教授　日中比較文学・漢文訓読論

・本文1,173ページ
・「不規則動詞表」3ページ
・奥付

扉には「SANSEIDO'S ／ NEW CONCISE ／ ENGLISH-JAPANESE ／ DICTIONARY | 最新コンサイス／英和辭典／石川林四郎 編 | 発音／倫敦大学教授 ダニエル・ヂョウンズ指導／ユーヂーン・ヘンダスン担当 | 新語篇／日本大学教授 森村豊 担当 | 三省堂」とある。「緒言」p.2によれば、「ダニエル・ヂョウンズ」は例の「ジョーンズの発音辞典」で有名な Daniel Jones を、また「ユーヂーン・ヘンダスン」はジョーンズの指導下にあった同じくロンドン大学の Miss Eugene Henderson を指すとの由である。

石川「緒言」は、まず本書の刊行に至った経緯を記している。簡略を期して刊行年だけを示せば、以下のとおり。

大正11年（1922）『コンサイス英和辞典』　刊行
昭和9年（1934）　同上　改訂版　刊行
昭和13年（1938）『最新コンサイス英和辞典』　刊行

したがって、私の手もとにある本書は、昭和9年『コンサイス英和辞典』改訂版に種々の改善を施したうえで、昭和13年に『最新コンサイス英和辞典』と改題して刊行、さらに昭和22年に至って森村豊の作成に係る「新語篇」を冠したものと考えてよいだろう。編者の石川（1879-1939）は『最新コンサイス英和辞典』刊行の翌年に亡くなり、「新語篇」付きの本書を目にすることはなかった。

『コンサイス英和辞典』改訂版に加えた改善点については、石川が「緒言」pp.1-2で六項目を挙げている。なかんづく注目すべきは第3項に記された「普通ノ訳語及ビ説明ニハ従来ノ文語体ヲ改メテ口語体ヲ用ヒ」ではなかろうか。昭和13年に至るまで、英和辞典の訳語や説明は文語体であったようだ。むろん他の英和辞典が本辞典に先んじて口語体を採用していた可能性もあるが、文語体から口語体への転換について昭和13年が一つの目安にはなるだろう。もっとも、「凡例」を見ると、たとえば「見出語（a）立体ノ肉太活字〔即チ labour ノ如シ〕ヲ以テ示ス」のように、〔　〕内に具体例を補足するときは、文語臭の強い表現「即チ…ノ如シ」が常用されている。たしかに口語体に義理立てして逐一「例ヘバ…ノヤウデアル」なぞと記したのでは、字数は多いは響きもまどろっこしいは、辞書に似合わぬこと甚だしい。簡潔さを重んずれば、やはり文語体に如（し）くは莫（な）しとなる。

このほか「緒言」には、p.1「慮ツテ」「終ニ」など、今日の大学生が読みあぐねるような書きぶりが見られ、また p.2第4項には「銓衡」のごとき字遣いもある。今ならば「選考」と記すところだろう。ただし、私個人が最も興味を惹かれるのは、p.1「終ニ」が現れる件（くだり）すなわち「浅学菲才ヲ顧ミズ、出版者ノ辞典報国ノ熱誠ト編輯部員ノ細心不屈ノ協力ニ依頼シテ、終ニ本書ノ完成ヲ企図シ」にほかならない。「辞典報国ノ熱誠」は、今や想いも着かぬ言い回しだろう。「編集」を「編輯」と書いている点にも「銓衡」に負けず劣らず関心を抱く。しかし、私の興味の焦点は「細心不屈ノ協力ニ依頼シテ」に見える助詞「ニ」である。ここで

の「依頼」は、「たのむ」ではなく、「たよる」意であろう。となれば、誰しも日本国憲法の前文「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して」を想い起こすのではないか。この「信頼」も「信じ頼る」意に違いない。かつて故・石原慎太郎氏は、この「～に信頼して」の助詞「に」に疑義を呈し、正しくは「を」であると主張した。なるほど「信頼す」を「信じて頼る」と言い換え、すんなり前者「信じて」につながるようにと考えれば、「を」のほうが好ましく映る。けれども、後者「頼る」との結びつきを念頭に置けば、むしろ「に」のほうが適切だとも看做せるであろう。そのように思うと、石川が記した「細心不屈ノ協力ニ依頼シテ」の助詞「ニ」も、熟語「〇頼」の「頼」が「たのむ」意のときは助詞「ニ」を使うものだとの語感に基づいているのではないかと想像されるのである。「依頼」を「依リ頼ル」と換言すれば、前者「依リ」にも後者「頼ル」にも助詞「ニ」で結びつけることができるので、「信頼す」と些か色合いが異なるのはたしかだが。

なお、上に「辞典報国ノ熱誠」を引いたが、石川はp.2「緒言」の末尾でも将来への意気込みを「之（＝英語の運用能力）ヲ世界ニ雄飛スベキ日本国民ノ鋭器トシテ…改善ニ改善ヲ加ヘテ真ニ報国ノ実ヲ挙ゲヨウトシテヰル本書ノ使命達成ノ為ニ」云々と書きつけている。「世界ニ雄飛スベキ日本国民」および再び繰り返された「報国」二字を以て昭和13年当時の雰囲気を窺い知ることができよう。学校で数年もの英語教育を受けていながら、依然として平易な日常会話すら覚束ない日本国民の現状を、泉下の石川はどのような面持ちで見ているだろうか。

森村「新語篇ノ序」にも、p.1「夙ニ」「洵ニ」やp.2「糺シテ」「具ニ甞メタ」「冀フ」など、やはり現在の大学生ではすっと読めない語句や用字が散見される。興味深いのは、森村が記している「新語篇」の基本方針三ヵ条の第1･2条だ。第1条を見ると――

> 本文（＝昭13『最新コンサイス英和辞典』）ガ英語ニ重点ヲ置イタノニ対シ、本編（＝「新語篇」）ハ米語ニ優先権ヲ与ヘテ、発音、分節法、ソノ他総テノ点ニ於テ米国式ニ倣ツタ。蓋シ、今後ノ国際情勢ニ於テ占ムベキ米国ノ地位ト、日本ノ地理的位置トノ関係カラ、斯クスルノヲ至当ト考慮シタカラデアル。

英語と米語を明確に区別し、将来アメリカが国際社会において重要な地位を占めることになるだろうと予測している。当時は未だ「アメリカ英語」という呼称がなかったのだろうか。つまらぬ疑問に思えるかもしれないが、私の念頭にあるのは、知人のフランス語教師が某大学で英語とフランス語を対照させて教えていたとき、ある男子学生が「英語は英国の言葉だから英語と呼ぶわけですよね」と念を押してから、「ではアメリカ人は何語を話しているのですか？」と真顔で質問してきたとの一件である。あまりの無知に知人は呆然としたそうだが、もしかすると件（くだん）の学生も「アメリカ英語」という呼び方さえ知っていれば、頓珍漢な質問をせずに済んだのかもしれない。何とも寒々しい逸話である。

第2条で、森村はPotsdam Surrender Ultimatumの説明について「辞典ノ領域ヲ離脱スルモノトノ誹リヲ受クルカト危ブマレル」との懸念を示しつつも、「本辞典ノ如キ性質ノモノニ百科辞書ノ長所ヲ或ル程度採用スルコトノ不可ナル理由ヲ編者ハ見出シ得ナイノデアル」と

述べている。そこで0029-l: Potsdam[1] を見てみると、まず「どいつ北部ノ都市」と記してから、「*Potsdam Surrender Ultimatum* ぽつだむ降服勧告最後通牒」〖俗ニぽつだむ宣言ト云フモノデ〗」云々との説明を加え、いわゆるポツダム宣言の内容を詳しく訳出している。たしかに小型の英和辞典としては記述が長すぎる印象だろう。しかし、森村は新たな時代の若者たちにポツダム宣言の内容をぜひ知っておいてほしいとの気持ちから詳細な紹介を試みたに違いない。「今さらポツダム宣言かい」と踏み倒せばそれまでだが、改めて読んでみると、少なくとも二つの点に気づかされる。

一つは「日本国民ノ民主主義的傾向ヲ復活強化スルコト」とある点だ。対応する英語の原文は“The Japanese Government shall remove all obstacles to the revival and strengthening of democratic tendencies among the Japanese people.”である。「日本国民ノ民主主義的傾向」の「復活強化」と言っている以上、戦前の日本に「民主主義的傾向」があったと認めているわけだ。今日、ともすると「日本の戦前は軍国主義、戦後は民主主義」と分かつ粗雑な史観が通念となっているかのように見受けるが、明治維新以来の富国強兵策をそのまま単純に軍国主義と受け取ってよいものか、改めて考え直す契機になるだろう。

もう一つは、森村の記している字句にも英語の原文にも「無条件降伏」unconditional surrender の語が見えない点である。これは暗に「天皇の地位保全」を条件として「即時降服ヲ慫慂」するとの意図を示しているのかもしれない。取るに足りぬ素人考えかもしれないが、日本の降伏が無条件降伏であったか否かについては今なお論議が交わされているものと承知している。少なくともポツダム宣言に「無条件降伏」の文字がないことは記憶に値するのではなかろうか。

今日の英和辞典がポツダム宣言について、たとえば『ジーニアス英和辞典』Potsdam 項が「the Potsdam Declaration ポツダム宣言（1945）」（G1499-l）[2] と甚だ素っ気ない記述で済ませているのを目にするとき、敗戦を迎えてから一年半弱、森村の詳細な紹介には当時ならではの情熱を感じ取ることができるのである。

奥付には、書名と価格「定価 金380円」の下に印刷・刊行の年月日が次のごとく記されている。便宜上、漢数字を算用数字に改めると――

昭和　4年8月10日　初版印刷
昭和　4年9月　1日　初版発行
昭和25年5月　1日　902版印刷
昭和25年5月　5日　902版発行

一瞥、本辞典は「昭和4年の英和辞典」と呼ぶのが妥当のようにも思える。しかし、「緒言」p.1に記された上引の経緯に鑑みれば、やはり「昭和13年の英和辞典」と称するほうが事実に近いだろう。

1）　以下、本辞典の字句の所載箇所は、ページ数（四桁）・ハイフン・左右の別 l, r（l=left, r=right）を以て示し、例文その他には一律に－を冠す。
2）　『ジーニアス英和辞典』第4版（大修館書店、2006年）。以下、略称 *Genius* は、この第4版を指す。所載箇所の表示形式は、G を冠する以外、すべて注1に同じ。

ちなみに、漢字の字体について言えば、扉の書名が「最新コンサイス英和辭典」であるのに対し、奥付の書名は「最新コンサイス英和辞典」に作る。戦後すなわち昭和21年に定められた当用漢字1,850字に基づく昭和24年の「当用漢字字体表」が早くも翌25年の奥付に反映されているわけだ。「発行」の「発」字も新字体で印刷されている。

もっとも、仔細に観ると、「初版」の「初」字は「初」となっており、第1画が旧字体を彷彿とさせる。面白いのは「神」字の場合で、「発行者」欄に記された三省堂の所在地は「神田神保町」のごとく旧字体「神」に作るが、「印刷者」欄では「三省堂神田工場」のように新字体「神」となっている。とはいえ、工場名だけは新字体で記すことにしたのかと思いきや、最下部の「製本」欄に目を移すと「三省堂神田工場」のごとく旧字体だ。その直下に見える「インデイア紙」の製造元も「三島製紙抄造」とあり、いわゆる二点辶（にてんシンニュウ）の旧字体が用いられている。いかな三省堂といえども、漢字の性急な字体改変に追いつけず、整然とは対応しかねたのであろう。

【B】体裁

次に本辞典の本文について体裁を観察してみよう。今、試みに１）平仮名と片仮名の使い分け・２）仮名遣い・３）漢字の字体・４）縦書き感覚の残存の計四項目に分かつこととする。

１）平仮名と片仮名の使い分け

開巻一番、驚かされるのは、平仮名と片仮名が現在とは正反対に使われていることだ。ふつうの地の文が片仮名、外来語が平仮名で記されている。明治期の文献ならば、漢字・片仮名交じりでも不思議はない。当時はまだ漢字には片仮名のほうが馴染みやすいとの文字感覚があったことを承知しているからだ。たしかに、漢字を崩し書きした曲線的な平仮名よりも、漢字の一部分を取り来たった直線的な片仮名のほうが漢字との親和性が高いとの理屈は納得できる。しかし、昭和13年（1938）の時点でも依然としてその種の文字感覚が強く残っていたという事実には少なからず驚かされた。論より証拠、その実態を見ていただきたい。

手始めに外国の人名に関する書きぶりを挙げてみれば、次のような具合である。

0208-l: Columbus あめりかノ発見者.
0940-l: Shakespeare: 英国ノ大詩人, 劇作家.

すぐわかるとおり、面白いことに、人名は項目そのものでは仮名書きされていない。仮名書きの人名が現れるのは、例文の訳中や派生語においてである。

0208-l: reserve − This discovery was reserved for Columbus. 此発見ハころんぶすヲ俟ッテ初メテナサレタ.
0940-l: Shakespearian しぇいくすぴあ（沙翁）ノ.

「此（この）」や「俟（ま）ッテ」がいかにも古風な印象だ。当時まだ Shakespeare について「沙翁（さおう）」とい

う呼び名が通用していたこともわかる。

固有名詞の仮名書きを避けようとする方針は、作品名などの説明にも窺える。

0099-r: Beowulf 八世紀初頃ニ書カレタ古代英語詩 ; 同上詩中ノ英雄ノ名.
0480-r: Hamlet Shakespeare 作悲劇ノ名 ; 同上ノ主人公.

「べおうるふ」とは見えず、Shakespeare も原綴のままである。どう仮名書きするかは、発音記号を読めば自明のこととされていたのだろうか。

一方、地名や国名については、名称を平仮名で示した直後、漢字表記を（　）内に示している。まずは地名を列挙してみると――

0150-l: Cambridge けんぶりっぢ（剣橋）
0617-r: London ろんどん（倫敦）
0732-r: Oxford おっくすふぉーど（牛津）

今日、こうした地名の漢字表記を必要とする向きは皆無に近いだろう。もっとも、漢字で記せば「剣橋」「牛津」のごとく各二字で済むところが、仮名で書くと「けんぶりっぢ」＝六字、「おっくすふぉーど」＝八字のように長たらしくなる事実は、今なお相応の覚悟を以て臨まねばならぬ表記上の不都合である。

ちなみに、地名が例文中に現れるときは、仮名書きされるのが常例だ。一つだけ例を挙げておく。

1126-l: visit － The plague visited London in 1665.　疫病ガ1665年ニろんどんヲ襲ッタ.

国名についても、地名と同じく、漢字表記が添えてある。

0071-l: Australia おーすとらりや（豪洲）.
同　: Austria おーすとりや（墺太利）.
0689-l: New Zealand にゅーじーらんど（新西蘭）〚南太平洋ニアル英自治領群島〛.

誰しも小学生のときオーストラリアとオーストリアの区別を意識して覚え込んだ記憶があるだろう。成人してからも、油断していると、ふと両者を見間違えたりする。漢字表記「豪洲」と「墺太利」ならば、似ても似つかぬ字面（じづら）なので、取り違える可能性は零（ゼロ）だろうが。それにしても New Zealand についての説明「南太平洋ニアル英自治領群島」には時代を感じざるを得ない。こうした過去へと想いを致させる字句に出逢うのも、古い辞典を読む楽しみの一つである。

では、わざわざ漢字表記を添える必要のない漢字文化圏の国家や地域はどうかというと、これがまたそれなりに興味深い。

0179-r: China 支那 － China tea 支那茶. － China town 支那街, 南京町.
0180-l: Chinese a. 支那ノ, 中華民国ノ ; 支那風ノ. n. 支那人, 中華民国人 ; 支那語.

どこにも「中国」の二字が見えない。ひたすら「支那（シナ）」である。私の亡き両親は、ふだん二人とも「中国」と呼んでいた。しかし、母はジャスミン茶を「支那茶」と呼んでいたし、父も決して「中華街」とは言わず、いつでも「南京町（ナンキンまち）」と呼んでいた。私は横浜生まれの横浜育ちだが、父が常に口にする「南京町」の名に慣れ親しんでいたため、「中華街」という呼び方を口にするようになったのは大学入学後のことである。Chinese の訳語に見える「中華民国ノ」「中華民国人」が歴史を感じさせることは言うまでもあるまい。

今日、「支那」は、中国に対する蔑称と捉えるのが通り相場だ。たしかに、中国や台湾のテレビドラマを観ていると、丸眼鏡・チョビ髭の日本軍人が登場し、いかにも馬鹿にしたように中国語で「支那（ジーナー）」と口にする場面が出てくる。けれども、ロンドンを音訳して「倫敦」と書くことが許されるのであれば、本来は China の音訳たる「支那」を用いても差し支えないはずだ。日中関係史の然らしむるところとはいえ、「支那」が蔑称になってしまったのは、返すがえすも残念なことである。

もちろん、本辞典は例文の訳中でも「支那」を用いている。

0209-l: come ① － Will you come with me to China? 支那へ僕ト一緒ニ行キマセッカ.

現代の我々の耳には、どことなくユーモラスにさえ響く訳文だが、それも時代の流れというものなのだろう。

一方、0535-l: Korea については単に「朝鮮」と記すのみ、台湾 Taiwan に至っては項目にすら立てていない。当時、日本の領土であった朝鮮・台湾ですらこのような扱いなのだから、東南アジアのタイ Thailand やヴェトナム Vietnam が見当たらないのも宜（むべ）なるかなである。

とはいえ、やはり時代のなせる業なのであろう、「満洲」となると、御丁寧にも「満洲国」まで立項されている。

0633-l: Manch（o）ukuo 満洲国.
同　: Manchu a. 満洲ノ ; 満洲人ノ ; 満洲語ノ. -n. 満洲人 ; 満洲語.

（o）の有無によって二種の綴りが可能だが、Manchukuo は英語名 Manchu に義理立てした綴り、Manchoukuo は満洲国の中国語の発音をそのままウェード式に綴ったものである。満洲国は、昭和6年（1931）の満洲事変を受けて、翌7年（1932）に建国、9年（1934）からは帝政が布（し）かれていた。実質上、日本の傀儡（かいらい）国家とはいえ、日本にとって重要な独立国との建前ゆえに、本辞典の立項するところとなったのであろう。小型の英和辞典にまで国策が反映されていたわけだ。

上掲のような固有名詞のほか、普通名詞も外来語は平仮名で記す方針が貫かれている。意のままに数例を挙げてみれば――

0178-l: chicken ②鶏肉, ちきん.
0273-r: dash[1] − coffee dashed with brandy ぶらんでーヲ混ゼタこーひー.
1144-r: wet − wet paint 塗リタテノぺんき.
1173-r: zythum 古えじぷとノびーる.

今や片仮名で記す習慣の言葉が「ちきん」「ぶらんでー」「こーひー」「ぺんき」「びーる」などと平仮名で書かれている。もしかすると、かえって新鮮な印象を覚えるかもしれない。

ちなみに、末尾の zythum は、本辞典が載せる最後の単語である。最近の英和辞典では、鼾（いびき）の擬音語 ZZZ が最後の項目になっているようだが。

２）仮名遣い

昭和13年（1938）に確定された本文を擁する以上、本辞典が歴史的仮名遣いで記されていることは言うまでもない。ただし、現在の我々が歴史的仮名遣いの常識としてわきまえている規則とは異なる場面もある。それが拗音と促音および撥音の表記だ。

（ア）拗音と促音

すでに引用例でお気づきの向きも多いと思うが、拗音は小書きにするのが本辞典の一貫した方針だ。その措置は、外来語の発音を近似音に仕立てるべく、母音を小書きで添えるのと同様である。先ずは、ここまでの引用例をも含めて掲げてみると――

0482-l: handicap ①... はんでぃきゃっぷ
0689-l: New Zealand にゅーじーらんど
0732-r: Oxford おっくすふぉーど
0940-l: Shakespearian しぇいくすぴあ（沙翁）ノ.
1123-l: Viena うぃーん（維也納）.

さらに新たな例を挙げれば――

0155-r: caramel きゃらめる（菓子）
0432-r: fun ダジャレ − for〔*or* in〕fun ジョウダッニ
0757-l: perchance ヒョットスルト.
0846-r: rattle n. ベチャクチャ喋リ − rattlepate オシャベリ

こうした拗音の小書きは現在の日本語の表記習慣と一致するため、平仮名と片仮名を入れ換えさえすれば、何ら抵抗なく受け取れるだろう。

また、上例にも散見されるとおり、促音の小書き「ッ、っ」も今日と同じである。これについては、改めて例を付け加えるまでもあるまい。

もっとも、本来は小字にすべき促音が並字で記されている場合もある。

0100-r: besides アマツサヘ, オマケニ.

この「アマツサヘ」は、もと「あまりさへ」の促音便形であるから、小字で「アマッサヘ」と書くのが正しいはずだ。小型の辞書の細かい文字のため、当該「ツ」が小字なのか並字なのか甚だ判読しづらいのだが、「アマツサヘ」の「ツ」はどうやら並字のように見える。他の促音便がすべて小字「ッ」で記されている以上、ここでも正しくは「アマッサヘ」に作るべきだろう。

ただし、事はそう簡単には済まない。現代の国語辞典でも、たとえば『講談社国語辞典』新版（講談社、1981年）は「あまつさえ」で立項し、《「あまりさえ」の音便》との説明を加えている。これは奇妙な印象だろう。音便形ならば「あまっさえ」となるはずだからだ。面白いことに、同じ出版社の『講談社カラー版日本語大辞典』（講談社、1989年）は、やはり「あまつさえ」で立項しながらも、《「あまりさえ」の音便「あまっさえ」の転》と説明している。促音便「っ」が「つ」に転じたとの解説だが、果たしていかがなものか。「突き立つ」が音便形「突っ立つ」から「突つ立つ」に転じることはあるまい。今一つ納得しがたい印象の残る説明である。

按ずるに、この混乱には、漢文訓読における「剰」の訓読み「あまつさへ」の表記が関係しているのではないか。「剰」の送り仮名を、たとえば〔唐〕杜甫「舎弟観自藍田迎妻子……」詩／三首ノ二「剰ヘ欲ス二提携シテ如ク レ意ノ舞ハント一」のように簡潔を期して「へ」一字だけに限ろうが、また〔唐〕寒山「少小帯経鋤」詩「剰ツサヘ被ル二自妻ニ疎ンゼ一」のごとく長めに「ツサヘ」三字を添えようが、「剰」を「あまつさへ」と訓ずることに変わりはない。そして、送り仮名の長短にかかわらず、歴史的仮名遣いを用いる以上、すべて仮名で書いても「あまつさへ」としか記しようがなく、「つ」は並字で、まともに「つ」と発音するのか、それとも、現代仮名遣いならば小字で「っ」と書くべき促音なのか、どうにも区別がつかないのである。ここで二つの態度があり得よう。一つは、あくまで「あまりさえ」の促音便形ゆえに「あまっさへ」と読む態度。もう一つは、語源に関する意識を捨て、「つ」を字面のままに「あまつさへ」と発音してしまう態度である。手もとの辞書を見るかぎり、古語辞典は前者「あまっさへ」を採っているが、漢和辞典は後者「あまつさへ」で載せており、漢詩の注釈書も、たとえば入谷義高［注］『寒山』（岩波書店《中国詩人選集》v.5, 1958年）は、上掲の寒山の詩句をp.27「剰(あま)つさえ自妻(じさい)に疎(うと)んぜらる」と書き下している。当書の書き下し文は現代仮名遣いであるから、「つ」を促音と解する余地はなく、まともに「つ」と発音しているとしか思えない。

要するに、日本語としての語源「あまりさへ」を重視すれば促音便形「あまっさへ」となるが、漢文訓読では語源に対する意識が稀薄化し、字面のまま「あまつさへ」と読むのが慣用だということになる。何ともすっきりしない印象だが、それが実情だ。今や日常生活で「あまっさえ」を使う機会はほとんどなく、敢えて使うのは漢文で「剰」字の訓読みを迫られたときくらいであろう。その「あまつさへ」がかつて本辞典にも besides の訳語として入り込んだと考えておくのが妥当ではあるまいか。

（イ）撥音

拗音と促音に比べると、本辞典の撥音は並字と小字の使い分けがややこしい。先ずは次の

一例を見ていただこう。

0804-l: press[1] ①〔あいろんヲカケテ〕押シノバス － press the trousers ズボンニ押シヲスル

外来語の平仮名表記「あいろん」は、例の基本方針どおりである。ところが、同じく外来語であるはずの「ズボン」は片仮名表記のうえ、「あいろん」と異なり、撥音が小字になっている。この「ズボン」の片仮名表記および撥音の小字表記が誤植でないことは、0738-r: pantaloon に「【兵】乗馬用ズボン〔将校ノ〕; [pl.]〖米〗ズボン.」、0739-l: pants に「〖米卑〗ズボン（= trousers）」などと見え、また1080-l: trousers に「ズボン － trouser pocket ズボンノぽけっと.」とあることから明らかだろう。

では、この「ズボン」をどう理解すればよいのか。まず、外来語でありながら片仮名で記されている点については、不可解としか言いようがない。0568-l: jacket を「ぢゃけつ」、0958-l: skirt を「すかーと」と平仮名で表記しているのに、同項の devided skirt には「すかーとニ似タ寛ズボン.」とある。この「寛」は、何と読むのか定かでない。「ゆる」か「ひろ」か、はたまた「ゆるやか」か。さすがに「だぶだぶ」ではなかろうが。いずれにせよ、ここでも「ズボン」は片仮名表記である。あるいは「ズボン」だけは、すでに外来語の域を脱し、もはや日本語に同化した語だと認識されていたのだろうか。それとも、英語ではなく、フランス語 jupon に由来するから片仮名で記したのか。しかし、そうだとすると0984-l: sponge に見える sponge cake に平仮名で「かすてら.」とあることと矛盾しよう。カステラは、もとポルトガル語だからである。というわけで、なぜ「ズボン」が外来語であるのに片仮名で表記されているのか、確たる理由は不明のままである。

一方、「ズボン」の撥音が小字で記されている点に関しては、ある程度まで説明ができそうだ。というのも、本辞典は、すでに引用した字句に見えたごとく「ころんぶす」「けんぶりっぢ」「ろんどん」および「ちきん」「ぶらんでー」「ぺんき」等々、外国語の発音中に現れる撥音は並字「ん」で表記しているものの、「一緒ニ行キマセンカ」「ジョウダンニ」などに示されていたように、和文中の撥音は小字「ン」で印刷する方針を採っているからである。現に0128-l: bread に「ぱん」、同項中の bread and butter には「ばた附ぱん」とあり、0673-r: muffin については「まっふぃん, 軽焼ぱん.」と見えるものの、いざ和文の訳語・訳文に現れる撥音となれば、次のような具合である。

0004-r: abound － He abounds in courage. アノ人ハ勇気ニ富ンデキル .
0108-r: bite[1] － A dog bit him in his hand. 犬ガ彼ノ手ヲ咬ンダ .
0209-l: come ② － in the years to come 来ラン年ニ於テ
0805-r: pretty a. － A pretty mess you have made! 飛ンダヘマヲシタモノダ .

一瞥、撥音便「ん」や推量の助動詞「む」が撥音化した「ん」などが小字「ン」で表記されているような景色にも映る。しかし、上掲「ジョウダンニ」のごとく字音語「冗談」にまで小字「ン」が用いられ、とりわけ例の「ズボン」の小字表記をも念頭に置くと、どうにも整

然とした統一的な解釈を下しかねるのである。釈然としないながらも、ここでは暫く「片仮名の撥音は小字で表記するのが本辞典の基本方針であった」とだけ考えておくことにする。

3）漢字の字体

昭和13年（1938）に確定された本文となれば、当用漢字が定められる以前の話であるから、言うまでもなく漢字はすべて旧字体すなわち康熙字典体を基本とする。気ままに数例を挙げてみれば――

0118-l: body ① 身<u>體</u>（＝身体）　0621-l: love ② <u>戀</u>愛（＝恋愛）
0804-r: pressure ① <u>壓</u>力（＝圧力）　1113-l: value ① <u>價</u>値（＝価値）

あたかも台湾で刊行されている英漢辞典のごとき趣である。いわゆる漢字文化圏の漢字は、つい最近まで康熙字典体で統一されていた。それを最初に乱したのは、誰あろう、日本人なのである。初発は昭和24年（1949）の「当用漢字字体表」にほかならない。時あたかも中華人民共和国が成立した年である。そして、今度は漢字の本家本元たる中国が昭和39年（1964）に「簡化字総表」「印刷通用漢字字形表」を発表し、康熙字典体を新たな字形すなわち我々の謂う簡体字へと改変した。その結果、現在は、なおも旧来の康熙字典体を用いる台湾・韓国、当用漢字体を踏襲した常用漢字体を使う日本、そして簡体字が流布した中国と、多くの漢字の字形が国家・地域によって三種に分かれる事態を招いている。具体例としては「藝＝芸＝艺」「嚴＝厳＝严」「發＝発＝发」などが典型だろうか。むろん、三者共通の字形（「人・女・士・日」など）もあれば、二者に共通の字形（台韓＋日「馬」≠中「马」／日＋中「声」≠台韓「聲」／台韓＋中「假」≠日「仮」など）もある。

いつぞや台湾に向かう飛行機のなかで、商用旅行と思しい隣席のアメリカ人と話を交わしたとき、「あなたは漢字を知っている日本人なのだから、私のようなアメリカ人とは違って、台湾に行っても不自由しないだろう」と言うので、「いや、日本の漢字と台湾の漢字は、発音はもちろん、字形も異なることが多い」と答えると、「本当か？ 漢字は一種類ではないのか？」と驚いていた。

字形に関するかぎり、「往時は一種類（康熙字典体）、現在は三種類（康熙字典体・常用漢字体・簡体字）」が正解だ。一種類時代の所産たる本辞典を目にすると、康熙字典体の漢字がいかにも落ち着き払って映る。ほぼハングル専用になってしまった韓国はさておき、半導体の生産力を誇る台湾で依然として康熙字典体が用いられているのを思うと、どうしても考え込んでしまう――日本や中国における漢字の字体改変は、本当に必要であったのか、と。

4）縦書き感覚の残存

英和辞典たる本辞典が横組みであることは言を俟たない。訳語の漢字の読み方が括弧内に縦組みの片仮名で示されていても、次のような例ならばスペース space の節約と受け取るまでである。

0525-r: immediate【商】直（ジキ）ノ

0650-l: mesh ①...[pl.] 罠（ワナ）
0805-r: prevent － Prevent us, O lord, in all our doings. 主ヨ我等ノナス業（ワザ）ヲ導キ給へ.

ところが、こうした読み仮名を目にして、どのみち0900-r: rush 1 -vt. ①「駆（カ）ル；急（セ）キ立テル」に見えるような「（カ）」や「（セ）」が二字に増えただけだろうと踏み倒すわけにはゆかぬ。なぜなら、括弧内の仮名が三字以上になると、現在の感覚とは異なる組み方になるからだ。

0764-l: partake vi. ①与（アヅ）カル...; 相伴（シウンショバ）スル

訳語の前者「与（アヅ）カル」については、上に掲げた例と同じ、ことさら言挙げするまでもない。けれども、後者「相伴（シウンショバ）スル」はどうか。現在ならば、まずは横組みの感覚で「シウンショバ」と字を逐ってしまい、まったく日本語にならないため、慌てて「ショウバン」と読み直すのではないか。横組みのなかに縦組みが混じっているのである。

実のところ、本辞典を初めて手に取ってペラペラとめくったときは、この左から右へと進む縦組みの混在に気づかなかった。まったく迂闊な話ではあるが、ようやく気づいたのは、次の単語がたまたま目に入ったときのことである。

1148-l: whirligig 独楽（コマ）...【虫】鼓虫（ミスシヅマ）

恥ずかしながら、私はこの単語を知らなかった。whirl が「ぐるぐる回転する」意であるから、「なるほど英語では独楽をこのように呼ぶのか」と納得したものの、後方に記された【虫】鼓虫（ミスシヅマ）がわからない。これまた恥ずかしくも「鼓虫」は未知の漢語だったので、すぐ括弧内に目をやったのであるが、横組みのはずだと思い込んでいたため、「ミスシヅマ」と読んでしまい、「たぶん和名がミスシヅマなのだろう」と考えて、「虫の名は片仮名で記すことが多いから、漢字で書けば“三筋褄”か。しかし、歴史的仮名遣いならば“すぢ”のはずだが」なぞと思い惑ったあげく、「シ」の右肩に濁点がないか目を凝らし、もし「ジ」だとすれば「ヂ」の誤植だろうかと迷うことひとしきり、ついに降参して *Genius* で whirligig（G2182-r）を調べてみた。すると、何のことはない、whirligig はミズスマシを指し、whirligig beetle とも言うらしい。むろん漢字で書けば「水澄まし」、水面を独楽のようにクルクル泳ぎ回るので whirligig と呼ぶわけだ。それにしても「水澄まし」を漢語で「鼓虫」と言うとは知らなんだ。もっとも、この「鼓」字こそが誤植で、正しくは「豉」に作るべきところ。「鼓」と「豉」は別字である。現代中国語でもミズスマシは「豉虫」chi^{3}chong^{2} と呼ぶ由。ミズスマシのお蔭で、わずかとはいえ賢くなった。

いったんわかれば造作もない。次のような読み仮名にまごつく向きは皆無だろう。

0305-l: disdain　vt. ... スルヲ屑（イギシサヨ）トセヌ
0805-l: pretend vi. ②佯（イツハ）ル － pretended illness 仮病（ケヤヒウ）
0942-l: shear 2 ① [pl.] 大剪刀（オハミホサ）

たとえ一瞬「屑」「佯」「大剪刀」などが読めなくとも、括弧内の読み仮名が縦組みで左から右へと進むのだと承知してさえいれば、それぞれ「イサギヨシ」「イツハル」「オホハサミ」と読むなぞ朝飯前である。

それにしても、横組みを基本とする本辞典が、なぜこのような縦書きの混在を許すような組み方をしたのだろうか。おそらく昭和13年（1938）当時、まだ「日本語は縦書きに記すのが本来の体裁だ」との意識が色濃く残っていたからではあるまいか。そうでなければ、括弧内の読み仮名をわざわざ縦組みにする理由はないはずである。

今でこそ日本語の横書きが大流行（オハリホヤ）、私の漢文の授業ですら横書きでノートを取っている学生が少なくない。「横書きでは返り点が付けづらいだろう？」と訊くと、「大丈夫です」との返事。不自然としか思えない蟹行の漢文に返り点を打っても、存外、視覚的な抵抗がないらしい。時代の変遷と言うべきか、世代の相違と称すべきか。本辞典が用いた上掲「仮病（ケヤヒウ）」のごとき読み仮名の組み方は、もはや現代の若者には肌感覚として受け容れがたくなっているに違いない。

【C】訳語・訳文

前引のように石川「緒言」pp.1-2は本辞典の改善点として六項目を挙げ、その第3項に「普通ノ訳語及ビ説明ニハ従来ノ文語体ヲ改メテ口語体ヲ用ヒ」と記して、文語体を口語体に改めた旨を明言している。しかし、実際には文語臭を帯びた訳語･訳文がそこかしこに散見し、とりわけ漢文訓読式の表現が口語体に身をやつしただけの言い回しに事欠かない。まずは漢文訓読臭の濃厚な訳語・訳文に注目してみよう。

1）漢文訓読式の表現

（ア）使役「しむ」

漢文訓読では、使役の助動詞は「しむ」一本槍、また逆に「しむ」は使役の意味に限定される。上代から見られる使役の意味をそのまま専一に保存しており、中古以後の和文に現れる尊敬の意味が紛れ込むことはない。本辞典では、この使役の文語「しむ」が口語「しめる」に姿を変えて登場する。

0154-l: capacitate　能ハシメル, 適セシメル
0601-r: let[1] ① ... セシメル.
0617-r: entitle 資格アラシメル.

こうした訳語に見える「シメル」が文語「シム」を口語体に改めた語にすぎないことは看て取りやすいだろう。もっとも、使役について常に「シメル」を使うわけではない。

0418-r: force[2] − force one to do[...] 某ニ強ヒテ... サセル
0630-l: make[1] ③ニ... サセル ; ニ無理ニ... サセル

使役とはいえ、漢文訓読の使役形を露骨に援用して「…ヲシテ～セシメル」と訳したのでは、あまりに生硬な印象のため、通常の口語体に訳したのであろう。結果として、本辞典には文語臭の強い「シメル」と口語体の「サセル」とが混在していることになる。

なお、上掲0154-l: capacitateの訳語「能ハシメル」については再び後述する。

（イ）再読文字

訳語に現れる再読文字は「将」と「未」の二字に限られるようだ。0947-r: should ③に見える「当然… スベキダ」は、もしかすると再読文字「当」すなわち「当ニ…スベシ」を下敷きにした訳語かもしれないが。

再読文字「将」すなわち「将ニ…（セント）ス」が最も露骨なのは次の訳語だろう。

0455-r: be going to（1）将ニ… セントシテヰル

「将」の再読「ス」を口語「シテヰル」に改めただけである。もう少し口語らしく訳せば次のようになる。

0005-l: be about to[do] 将ニ… シヨウトシテヰル

とりわけbe about to[do]について、現行の英和辞典は例外なく「将ニ」を仮名書き「まさに」に改めている。そのためか、大学の英語教員でも「まさに」は漢字で記せば「正に」すなわち「まさしく、たしかに」の意だと思っている向きが少なくない。それがただちに誤訳を引き起こすわけではないが、もと再読文字「将」を用いた訳語であることはわきまえておきたいものである。

「未」は、再読文字ならぬ一読文字としてyetの訳語に用いられている。

1168-l: yet ②〖否定的構文ニ用ヒテ〗マダ（… シナイ）, 未ダ嘗テ

否定辞notと組み合わさりnot…yetとなっていれば、再読文字「未」すなわち「未ダ…（セ）ズ」をそのまま適用できる。しかし、単独のyetでは否定を含む訳語を付けられない。そこで已むなく「未ダ嘗テ」としたのだろう。再読文字「未」の初読「未ダ」しかなく、再読「ズ」がない以上、敢えて言えば一読文字である。だからと言って「未ダ」とだけ記したのでは、直前の訳語「マダ」と似たり寄ったり、気の利かぬこと甚だしい。それゆえ、漢文にしばしば現れる「未嘗」の訓読「未ダ嘗テ」を以て訳語としたのではなかろうか。0688-l: neverでは、「カツテ」を「嘗」ではなく「曾」に作り、「未ダ曾テ… ナイ」と訳しているが。

（ウ）所ノ

日本で英語学習が本格化し始めた明治初期、漢文で名詞句を形成する「所レV^{スル}」（Vする所）は、殊に英語の関係節の翻訳において、先行詞を修飾する形容詞句「所ノレV^{スル}」（Vする所の）として愛用された。一例を挙げておけば――

Do	you	see	the	boy	who		has	a	flag?
ナスカ	汝ハ	見		男児（ヲ）	其人ハ	所ノ	持ツ		旗ヲ
（九）	（一）	（八）		（二）（七）	（三）	（六）	（五）		（四）[3]

漢数字の番号順に訳語を並べれば、「汝ハ男児［其人ハ旗ヲ持ツ所ノ男児］ヲ見ナスカ」となる。生硬にして珍妙な日本語とはいえ、意味が理解できるのはたしかだろう。［　］内を見ればわかるとおり、関係節「其人ハ旗ヲ持ツ所ノ」が先行詞「男児」に掛かる形容詞句になっている。関係代名詞 who に二つの訳語を当てている点は再読文字を想わせ、また冠詞 the, a の訳語が省かれている点は置き字を連想させる。明治初期の英文解釈は、このように漢文訓読臭が濃厚なもの、いわば英文訓読であった。

ただし、本辞典では、この種の「所ノ」は影が薄い。what, when, where, which, who など関係代名詞・関係副詞の類を検してみても「所ノ」は皆無である。もっとも that については話が異なり、以下のごとく訳語に「所ノ」を連発している。それぞれに掲げられた訳文中には「所ノ」が一つも見えないけれども。

1046-r: that ①〖指示代名詞〗(b)〖関係代名詞ノ先行詞トシテ用ヒル...〗(... スル所ノ）物 ; （... スル所ノ）人.……② 〖関係代名詞〗(a)〖先行詞ヲ制限スル節ヲ導ク場合...〗... スル所ノ, ... デアル所ノ (b)〖時ナドヲ示ス名詞ヲ受ケテ関係副詞的ニ用ヒル場合〗... スル所ノ（時 、様態 、方法等）.

このほか「所ノ」が目に入ったのは、今のところ次の二語の訳文・訳語だけである。

1146-l: whence ③ (2)... スル其処 − the source from whence it springs 其処カラソレガ発生スル所ノ源.
1152-l: willing ② 望ム所ノ

こうした趨勢から推せば、漢文訓読に由来する「所ノ」は消えゆく運命にあったと見えるだろう。気の早い向きは、もはや滅びた訳語と決めつけるかもしれない。しかし、事実は然らず、「所ノ」は仮名書き「ところの」に身をやつして、今なお関係詞の訳語として英和辞典に載っている。以下のごとく *Genius* の記述も例外ではない。

where［関係副詞］…するところの（G1177-r）
I remember the house where I was born. ＝私は自分の生まれた▬家を覚えている。
which［関係代名詞］…する（ところの）(G2180-l)
The bicycle which I sold was old. ＝私の売った▬自転車は古かった。

3）　西山義行［訳］『ウヰルソン氏第二リードル 独案内』（東京二書房蔵版、明治16年〔1883〕）pp.5-6.「リードル」は reader の音写、「独案内」は独習書の意。また「東京二書房」は、当時、神田区表神保町にあった「開新堂」と同区裏神保町にあった「三省堂」の二書肆を指す。なお、原書では各単語に発音を示す片仮名が付いているが、今は省略した。

whom［関係代名詞］…する（ところの）（G2187-r）

The girl whom John married is a nurse. ＝ジョンの結婚した▬相手は看護師です。

whose［関係代名詞］その（…が）…する（ところの）（G2188-r）

I met the man whose son had won the race. ＝息子が競争に勝った▬男の人に会った。

四例中三例の「ところの」が括弧書きになっているのは、できれば「ところの」と訳すことを避けたいとの意識の表れだろう。実際、それぞれの訳文の▬の部分に「ところの」が入っていても不思議はないのだが、いずれについても「ところの」は見えない。訳語として掲げておきながら、実際には使おうとしないのである。こうした事情を明確に示すのは that に関する記述であろう。

that［関係代名詞］…である（ところの）（G1972-l）

He is the man that lives next door to us. ＝彼は私たちの隣りに住んでいる▬人です。

やはり「ところの」が括弧付きで記され、▬の位置に「ところの」が見えない。そのうえ、例文に先立つ語法欄（1）に次のような字句がある。

日本語では that 自体の訳はふつう表面に出ない.

この説明は「通例〈ところの〉と訳すことはない」意に解してよいだろう。要するに「ところの」こそ「that 自体の訳」というわけだ。考えてみれば、これは当然のことでもある。日本語に関係詞がない以上、まともには訳せない。そこで已（や）むなく漢文訓読表現「所ノレV（スル）」（V する所の）を借り来たり、さらに仮名書き「ところの」に改めて仮の訳語とする。けれども、生硬に響く「ところの」は、もはや耳遠い表現であることを免れない。したがって、訳文からは「ところの」を省く――これが *Genius* の採った方針であり、また同時に、遠く本辞典において採用された方針でもあった。関係詞の訳語「所ノ」＝「ところの」に関するかぎり、英和辞典は、長足の進歩を遂げたとは言いがたく、相変わらず漢文訓読表現に頼っているのである。「ところの」と仮名書きすることによって、漢文訓読表現であるとの印象が薄まっただけにすぎない。[4)]

（エ）その他

以上のほかにも、本辞典には漢文訓読表現が各処に見られる。体系を備えた調査には程遠いが、いくつか目についた語句を挙げてみよう。漢文訓読表現が好んで用いられているさまを察するには十分と考える。

0014-r: addition － in addition 加之（シモカ）

4）「所ノ」について、詳しくは拙文「英和辞典に見る漢文訓読の影（かげ）と響（ひびき）――関係詞の訳語「ところの」をめぐって」／水門の会［編］「水門――言葉と歴史――」第24号（勉誠出版、2012年10月）pp.99-108を御参照いただければ幸いである。

漢文「加之」は、定石の熟字訓「シカノミナラズ」に限らず、レ点で返して「加フルニレ之ニ」（之ニ加フルニ）、「之」を置き字扱いして単に「加フルニ之」（加フルニ）と読むなど、数種の訓読が可能だが、やはり辞典の記述だからであろうか、最も簡潔な熟字訓「シカモ」を採っている。ただし、執筆者の脳裡に「（之ニ）加フルニ」も浮かんでいたことは間違いあるまい。直後に掲げた in addition to を「ニ加フルニ」と訳しているからである。

0093-l: because　何トナレバ... ダカラ

「何トナレバ」は、漢文で原因・理由を導く「何者」の訓読「何トナレバ者」そのものである。私は中学･高校時代（1969-75）に数学の教員から、数式中で理由づけを表す記号「∵」は「なんとなれば」と読むようにと教わった。往時は数学にまで漢文訓読語が入り込んでいたのである。現今は「∵」を「なぜなら」と読むのが通例のようだが。[5)]

0102-r: between　－　between the devil and the deep sea *or* between two fires　進退谷（キマ）ッテ

直訳すれば「悪魔と深い海とに挟まれて」「二つの火事に挟まれて」との表現であるから、どちらも「進退谷ッテ」の意になることは納得できよう。しかし、「谷ッテ」の表記には違和感を禁じ得まい。今日の用字感覚ならば「窮マッテ」こそ穏当、たしかに「谷」は両側に山が迫っている地形なので「キハマル」イメージと結びつきはするが、「谷」を動詞に使う例は目にしたことがない、と。けれども、この「進退キハマル」が、もと中国最古の詩集『詩経』大雅「桑柔」の一句「進退維谷」（進退維レ谷マレリ）に由来する表現だとわかれば、違和感は立ちどころに氷解するだろう。「谷ッテ」は、決して奇を衒った用字ではなく、出典に忠実な字遣いなのである。「維」（維レ）は、何かを指して「これ」と言う指示語ではなく、単なる助字であるから、省いても意味に差し障りはない。そのようにして出で来たったのが「進退谷ッテ」という訳語だ。これも漢文訓読を踏まえた訳語の一例にほかならない。

0143-l: but for ... ナカリセバ, ... ガナカッタラ（＝ if it had not been for; if it were not for）.

この訳語を漫然と受け取ってはならない。後方の括弧内を見れば一目瞭然、but for は仮定法すなわち反実仮想法に関わる表現だからである[6)]。後方に示された口語体の訳語「... ガナカッタラ」では、まったく反実仮想の意味合いが表出できない。前方に掲げられた漢文訓読

5）　矢野健太郎［編］東京理科大学数学教育研究所［第2版増補編集］『数学小辞典』（第2版増補、共立出版、2017年）表紙見返し「数学記号表」見開き右頁右列「論理」記号欄。

6）　英語の「仮定法」は、用語として甚だ不適切、正しくは「反実仮想法」と名づけるべきである。不用意に「仮定法」なぞと呼ぶから、生徒たちは「“If it rains heavily, I'll stay home.”のような文章だって〈もし大雨が降ったら〉と仮定しているのに、なぜこれが仮定法ではないのだろう？」と戸惑い、脳裡がもやもやしているうちに授業が進んで、「仮定法」は大の苦手、結果として英語嫌いになってしまうのではなかろうか。文語文法が推量の助動詞「まし」について「…ましかば～まし」を「反実仮想」と名づけている知恵に学ばねばなるまい。音読み「ハンジツカソウ」では今一つ理解が行き届かない場合は、それこそ漢文の出番、「反シテレ実ニ仮ニ想フ」（実に反して仮に想ふ）と訓読してみせれば、理解・記憶にとって有力な助けとなること請け合いではなかろうか。

語「…ナカリセバ」こそ反実仮想であることを明確に示す訳語なのである。

英語の「法」mood は、直説法・命令法に仮定法が寄り添っている程度、屈折変化を持つ西欧語としては例外的にお寒い状態である。一方、漢文つまり古典中国語となれば、屈折変化のない孤立語ゆえに、そもそも「法」なぞありはしない。何かが仮定されていても、それが単なる仮定にすぎないのか（直説法）、それとも、事実に反することを仮に想定しているのか（仮定法）、語形その他の文法標識は皆無、いずれなのかはもっぱら文脈に頼って判断するしかない。

ところが、甚だ面白いことに、そのような漢文にも一つだけ仮定法すなわち反実仮想法を表す単語がある。それが「微」であり、その訓読こそ「微カリセバ」（微カリセバ）にほかならない。すなわち「微カリセバ」は、漠然と「…ガナカッタラ」と仮定する語ではなく、「実際は存在したのだが、もし仮に存在しなかったとすれば」との意味合いで仮定を表す語なのである。

『論語』が知識人の必読書であった往時においては、誰しも『論語』憲問に見える次の一文が耳に残っていたに違いない。

微カリセバ二管仲一、吾其レ被リレ髪ヲ左ニセンレ衽ヲ矣。
管仲微かりせば、吾 其れ髪を被り衽を左にせん。

「微管仲」は「（管仲は過去に実在した人物だが、もしその）管仲がいなかったとしたら」を意味する反実仮想である。「微」は英語ならば仮定法過去完了の表現 If it had not been for に相当し、好みとあらば But for や Without に書き換えることもできるはずだ。事実、手もとにある『論語』の英訳書で「微管仲」三字を検してみると、人名「管仲」のローマ字化方式 romanization system の相違を除けば、以下のごとく五者四様の訳文になっている。

・J. Legge: But for Kwan Chung,...
・D. C. Lau: Had it not been for Kuan Chung,...
・C. Huang: But for Guan Zhong,...
・B. Watson: Without Guan Zhong,...
・A. Chin: If not for Guan Zhong,...[7)]

前置詞 Without や前置詞句 But for のほか、基本形 If it had not been for の If を省いた倒置形 Had it not been for や省略形 If not for など、さながら大学入試英語の書き換え問題のような景色だ。いずれも主節は we would [should, might well] (now) be wearing our hair loose [down, unbound]... のごとく過去時制を用いた帰結節になっている。「微」に仮定法すなわち反実仮想の用法があることは明らかだろう。むろん「微」字それ自体に仮定法過去完了を表す標識

7）*Confucian Analects*, tr. etc. by James Legge, The Chinese Classics v.1, reprinted by SMC Publishing Inc., Taipei, Taiwan, 1991; 14-18-2, p.282.
Confucius: *The Analects,* tr. by D.C.Lau, The Chinese University Press, Hong Kong, 1979; Book 14-17, p.137.
The Analects of Confucius: tr. etc. by Chichung Huang, Oxford University Press, New York, 1997; Book 14-17, p.144.
The Analects of Confucius: tr. by Burton Watson, Columbia University Press, New York, 2007; Book 14-18, p.99.
Confucius: *The Analects*, tr. etc. by Annping Chin, Penguin Books, Penguin Group, 2014; Book 14-17, p.230.

は何もなく、主節「吾其被髪左衽矣」にも時制の目印は一切ない。「其…矣」は、確信のこもった強い語気を表しこそすれ、時制や法の概念とは無縁である。

要するに、本辞典が but for の訳語の先頭に漢文訓読語「… ナカリセバ」を掲げたのは、適切にして至当な措置なのである。むろん、反実仮想となれば、古語「…マシカバ（…マシ）」を持ち出す手もあっただろう。しかし、本辞典は、そのような古語は採らず、漢文訓読語を選んだ。そこには、古語「… ナカラマシカバ」よりも、漢文訓読語「… ナカリセバ」のほうが、簡潔なのはもちろんのこと、身近な語句でもあるとの判断があったに違いない。昭和13年（1938）当時、漢文訓読表現はなおも命脈を保っていた。現代日本語がこうした表現を失ったことは、文字どおり痛恨の極みである。

0172-l: change － change into（…steam）〔水ガ〕変ジテ（蒸気）トナル.

主語〔水ガ〕に相当する英語 water を記していないのは、change into の意味さえわかればよいとの意図からなのだろう。ここに見える訳語「変ジテ…トナル」は、明らかに漢文「変為…」の訓読「変ジテ為ルレ…ト」（変（ヘン）ジテ…ト為（ナ）ル）である。口語体の日本語ならば、格助詞は「ト」よりも「ニ」のほうが自然に響くはずだが、漢文訓読調が念頭にあれば、勢い「ト」を用いることになるわけだ。「変ジ」た結果を示す「為ルレ…ト」は、中国語の文法に謂う結果補語である。口語体で「〔水ガ〕（蒸気）に変化する」（〔水〕－蒸気－変）と訳すよりも、むしろ漢文訓読の言い回し「〔水ガ〕変ジテ（蒸気）トナル」（〔水〕－変－蒸気）のほうが、英語の語順 change into steam（〔water〕－ change － steam）に忠実だとも考えられよう。細かいことながら、こうした点でも漢文訓読式の表現は決して侮れない。

0364-r: ever ①… 曾（カツ）テ ③… 苟モ

一見、取り立てて言うべきことは何もないかのようだが、この項目を目にしたときは少しく驚いた。「曾（カツ）テ」には読みが示されているが、「苟モ」には読み方を添えていないからである。今日の大学生に「曾テ」と「苟モ」を提示して読ませたら、結果はどうなるか。どちらも読みあぐねる者が大半を占めるだろうが、おそらく「曾テ」を「カツテ」と読める学生のほうが、「苟モ」を「イヤシクモ」と読める学生よりも多いのではなかろうか。相対的に「曾テ」が易、「苟モ」が難との結果は動くまい。しかし、本辞典は「曾テ」に読み仮名を付け、「苟モ」はそのまま放置した。いずれも漢文訓読では馴染みの深い語のはずだが、昭和13年（1938）の時点では「曾テ」よりも「苟モ」のほうが読みやすいとの判断が下されたものと見える。今一つ確実なことはわからないが、日本人の漢字力の変遷を知るうえで一つの資料となり得るかもしれない。

一方、読み仮名が示されていても、今やほとんど見かけない漢字ゆえに違和感が奔ることもある。たとえば「いつはり」だ。現在では「偽り」が標準の表記であろう。もし漢字に凝ったとしても「詐り」くらいが関の山ではないか。しかし、本辞典は平気で「佯」字を用いている。

0630-r: make-believe　カコツケ, 佯（イヘ）リ

この「佯（イヘ）リ」という漢字は、前掲0805-l: pretend の訳語にも見えた。括弧内に読み方を示すくらいなら「偽り」と書けばよさそうなものだが、おそらくは漢文を通じて「佯」の意味合いに馴染んでいたからであろう、「真」に対する「偽」ではなく、「（いつわって）見せかける、うわべを取り繕う」意となれば、やはり「佯」こそふさわしいとの判断があったに違いない。漢文の一例を挙げれば、『荀子』非十二子「利心無クシテレ足ルコト而佯ルレ無シトレ欲者也」すなわち「利益を追い求めて満足することがないくせに、さも無欲であるかのように装う輩である」との意。「佯」の意味合いがよくわかるだろう。本辞典には、こうした「佯≒偽」のごとき同訓異義に関する配慮も働いているわけだ。漸く稀薄化しつつあったとはいえ、なおも漢文の知識が教養の根底に残存していたと見ることができる。

1049-r: thick　－ the air thick with snow　降雪デ咫尺（シキ）ヲ弁ゼヌ空

「降りしきる雪のために一寸先さえ見えない荒天」の意であるが、その「一寸先さえ見えない」を「咫尺ヲ弁ゼヌ」と訳している。口調から察せられるとおり、これは漢文「不弁咫尺」の訓読「不レ弁ゼ二咫尺ヲ一」（咫尺ヲ弁ゼズ）に基づき、打消の助動詞「ズ」をナ行系列の連体形「ヌ」に改めたものである。純粋な漢文訓読ならば、連体形にはザ行系列の「ザル」を用いるのが通例だが、「弁ゼザル」では響きが少々もたつくため、簡潔を期してナ行系列の「ヌ」に換えたのであろう。

「不弁咫尺」は、〔明〕都穆『都公譚纂』巻下「天昏黒ニシテ、咫尺モ莫シレ弁ズル」の「咫尺莫弁」と同義。ただし「不弁咫尺」四字が整ったのは、『清史稿』災異志五においてのことである。

ついでに、やはり thick に関わる訳語を観ておこう。

1050-l: thick-and-thin　水火モ辞セヌ, 終始渝（カハ）ラヌ, 忠実ナ.

この語は形容詞、本辞典では一つなぎの連語として立項されている。訳語の第一「水火モ辞セヌ」は、漢文「水火不辞」の訓読「水火モ不レ辞セ」（水火モ辞セズ）を取り来たって、やはり打消の助動詞「ズ」をナ行系列の連体形「ヌ」に改めたものである。

「水火不辞」は、もと『史記』孫子呉起列伝に「兵既ニ整斉タリ、王可シ二試ミニ下ツテ観ルレ之ヲ。唯ダ王ノ所ノミレ欲スルレ用キントレ之ヲ。雖モレ赴クト二水火ニ一、猶ホ可也」とあることから、万難を排して忠実に振る舞うことを意味する。もっとも、「水火不辞」の四字が揃って用いられるようになったのは、いわゆる「三言二泊」の一書『二刻拍案驚奇』（1632）以降のことであったようだ[8]。そうだとすれば、江戸中期以後の白話系「三言二泊」の流行が遠く本辞典にも影響を与えていることになる。

訳語の第二「終始渝（カハ）ラヌ」には、字遣いに違和感を抱く向きがあるかもしれない。ふ

8）『漢語大詞典』は「水火不辞」項に『二刻拍案驚奇』巻四の用例を挙げている。また、『中国成語大辞典』（上海辞書出版社、1987年）は「水火不辞」項に清代小説『東遊記』第33回の用例を引いている。

つうに「変ラヌ」と書けばよいのに、わざわざ難しい「渝」字を用いて読み方を示すなぞ無駄な手間もよいところ、つまらぬ衒学趣味ではないか、と。しかし、この「終始渝（カ）ラヌ」も、漢文「終始不渝」の訓読「終始不レ渝ラ」（終始渝（シウシカハ）ラズ）を持ち込み、やはり打消の助動詞「ズ」を連体形「ヌ」に活用させたものだ。原漢文のとおり「渝」に作ったにすぎない。出典は『旧唐書（くとうじよ）』姚璹（ようじゆ）伝「歳寒（サイカン）モ無（ナ）ク レ改（アラタ）ムルコト、終始不レ渝ラ」である。

本項目の執筆者は、四字成語「水火不辞」「終始不渝」の訓読に基づく訳語を並べてから、おとなしく「忠実ナ」と書き添えている。二つの漢文訓読表現を優先して掲げる――このような訳語の示し方は、今日の英和辞典ではもはや考えられもしないだろう。

以下、漢文訓読臭を漂わせる訳語の例をいくつか簡潔に挙げておこう。原漢文は、それぞれの右に＊を以て訓読形で掲げておく。

0005-l: above － above all トリワケ, 就中.	＊就中＝「ナカンヅク」（熟字訓）
0719-l: or ③然ラザレバ. － or else（同左）	＊不レバ レ然ラ＝「シカラザレバ」
1048-r: then ②（a）［時間］シカル後ニ.	＊然ル後ニ＝「シカルノチニ」
1063-l: totally 悉ク	＊悉ク＝「コトゴトク」
1112-l: vain － in vain（1）... 徒ラニ	＊徒ラニ＝「イタヅラニ」
1134-l: want ①欲スル	＊欲ス＝「ホツス」
1145-l: what is called 所謂（イユハル）	＊所謂＝「イハユル」（熟字訓）
1168-l: yes ①... 然リ	＊然リ＝「シカリ」

大半が漢文の訓読形そのものである。唯一、漢文訓読語と相違するのは「欲スル」だが、これとて訓読に用いる文語「欲ス」の活用語尾を口語体に改めた訳語にすぎない。前述のごとく、本辞典は文語体を捨てて口語体を取ったはずである。しかし、実際には漢文訓読語が少なからず剥き出しのままなのだ。

翻って考えてみるに、こうした訓読語を硬い文語と捉えるのは、もしかすると時勢の然らしむるところ、現代の我々が抱く身勝手な印象なのかもしれない。本辞典の執筆者たちにとって、上掲のような訓読語はなおも身近な語彙であり、我々が嗅ぎ取るほどには文語臭を感じていなかったのではないか。速断は禁物だが、そのように考えなければ、編者の石川が「緒言」第3項で「従来ノ文語体ヲ改メテ口語体ヲ用ヒ」と明言した本意が汲み取れず、虚言を弄したとさえ受け取られかねまい。文語と口語の境界にまたがる曖昧領域（グレーゾーン）は、往時において想像以上の広がりを持っていたのではないだろうか。

ここで諺に関する漢文訓読調の訳文も挙げてみよう。

0688-l: never － It is never too late to mend. 過ッテ改ムルニ憚ル勿レ.

一瞥、『論語』学而および子罕に重出する「過チテハ則チ勿レ レ憚ル レ改ムルニ」の訓読を応用した訳文で、英語の諺と漢文の一句を等価と看做していることがわかる。「則チ」が見当たらないのは、当時この種の「則」を置き字とする流儀の訓法があったからか、または、なまじいに「すなはち」と読んだりすると通常の日本語に謂う「すなはち」と混同する可能性が生じる

のを避けようとしたためか、もしくは「則」を脱しても意味に変わりはないと判断したからか。いずれにせよ、あっさり『論語』の名高い一句を示しただけで事足れりとしたのは、本辞典の使用者に漢文の基礎知識を期待していたからに相違ない。『論語』の有名な一句さえ挙げておけば、説明や現代語訳なぞ必要あるまい、と。

けれども、今は情勢が異なる。大学の教室で必要あって『論語』学而の冒頭「学ンデ而時ニ習フレ之ヲ、不ニ亦タ説バシカラ一乎」を例に挙げても、学生の半数以上が「聞いたことがありません」と答える御時世だ。そのような実情を察してか、*Genius* の mend -vi. ❷は同じ It is never to late... に「行ないを改めるのに遅すぎることはない」（G1223-l）と現代語訳を添えるだけである。

同じ諺の訳文でも、片や漢文訓読調の文語文、片や日常会話風の口語文――日本語の変遷をこれほど如実に示す例も珍しいのではないか。

もう一つだけ諺を観ておこう。

> 1151-r: will[2]　－ Where there is a will there is a way.〖諺〗決意ガアレバ方法ハアル. 精神一到何事カ成ラザラン.

今度は、口語体の訳文に、漢文の成句を用いた訳文が添えてある。もっとも、この『朱子語類』八「精神一到何事カ不ランレ成ラ」を取り来たって Where there is a will... に引き当てるのは、本辞典に限った話ではなく、*Genius* の where 接❸も「意志ある所には道がある」としてから、同じく「精神一到何事か成らざらん」（G2178-l）と記す。どうやら「精神一到～」は数十年の時を超えて Where there is a will... の定訳となっているようだ。

最後に、あまり見慣れぬ（と私には思われる）法律用語を観ておくことにする。

> 0692-l: nisi -conj.[L.]【法】ニアラザレバ, ニアラズンバ. decree（order）nisi 定時日前ニ反対ノ事由ヲ示サナイ限リ確定スル判決（命令）.

いかにも法律用語らしく、略号 [L.]（= Latin）が示すように、ラテン語に由来する硬い一語である。この種の単語には、古色蒼然たる文語体の訳語こそ似つかわしい。穏便な文語としては「ニアラネバ」くらいだろう。しかし、本辞典は、打消の助動詞「ず」をザ行系に活用させて「ニアラザレバ」と記している。やはり漢文訓読の語感が背景にあるからに違いない。「ニアラズンバ」は、さらに漢文訓読色の濃い中世以降の言い回しで、漢文訓読語そのものと看做してよかろう。

ただし、訳語「ニアラ▾ザレバ［ズンバ］」がなぜ「定時日前ニ反対ノ事由ヲ示サナイ限リ確定スル」意になるのか、今一つ明確でない憾みが遺るのもたしかである。たぶん「示サナイ限リ」が「示スニアラ▾ザレバ［ズンバ］」に相当するのだろうとの見当はつく。けれども、何やらわかったようなわからないような知的不満を覚えることは否定できまい。

その点にかけては、現行の英和辞典のほうがはるかに親切だ。例によって *Genius* を参照してみると――

nisi【ラテン】形〖法〗［名詞の後で］一定期日前に異議申立てがないと効力を生ずる，仮…‖ a decree nisi 離婚仮判決 / an order [a rule] nisi 仮命令.（G1314-l）

用法「名詞の後で」も丁寧なうえ、「一定期日前に…」と説明してから訳語「仮」を掲げている点もわかりやすい。上掲の本辞典の記述と引き合わせれば、どうやら a decree [an order] nisi のごとく用いるのが通例らしいとの見当もつく。

しかし、だからといって、本辞典の記述が不親切で、もはや用済みとの話にはならない。両辞典の字句を比較すれば、品詞が異なっていることに気づくだろう。*Genius* が形すなわち形容詞としているのに対し、本辞典は conj.（= conjunction）すなわち接続詞としている。英文法の常識に照らせば、誰が見ても *Genius* の形容詞説に軍配を挙げるのではないか。後置された接続詞 nisi が前置された名詞 a decree[an order] の修飾語となるのは、いかにも不自然だからである。名詞を修飾するのは形容詞に決まっているではないか、と。

けれども、本辞典の〈nisi ＝接続詞〉説を、ただちに誤謬と断じてにべもなく斥けることはできない。なぜなら、ラテン語としての本然の姿を考えれば、nisi は紛れもなく英語 if not; unless に相当する接続詞だからである。[9]

要するに、nisi について *Genius* があくまで現行の英語における用法を念頭に置いて形容詞と捉えているのに対し、本辞典は本来のラテン語としての品詞を重んじて接続詞と記したわけだ。本辞典には本辞典なりの言い分がある。往時の英和辞典とて決して嘗めたものではない。その接続詞 nisi が、英語では名詞に対して後置され、あたかも形容詞のごとく機能するようになった――これが真相なのだろう。[10]

（オ）記号：二（に）の字点「〻」

現行の日本語は、ほとんど踊り字（反復記号）を使わなくなっている。唯一なおも用いているのは「人々」「時々」などの俗称「ノマ」こと同（どう）の字点「々」だけであろう。

けれども、漢文訓読の場では今でも二の字点「〻」が使われている。「〻」は、「同じ発音（濁音化を含む）を二度にわたって繰り返し、その漢字を訓読みせよ」との指示を表す記号で、漢字の読み方に関わるため、送り仮名と同等の機能を果たすものと考えてよい。「交〻」（こもごも）・「抑〻」（そもそも）・「看〻」（みすみす）などが典型だ。現在でも「〻」をそのまま書き下し文に持ち込んで憚らない訓読者がいる。かつては通常の日本語に「夫〻」のごとく宛字を用いて「それぞれ」と読ませる向きも少なくなかった。

では、漢文訓読の場は例外として、通常の日本語から「〻」が消えたのは、果たしていつなのか。日ごろの怠慢が祟り、今それを立証する素材は持ち合わせていない。しかし、少なくとも昭和13年（1938）の時点で「〻」が生命力を保っていたことは事実である。それを証明するのが「〻」を頻用する本辞典にほかならない。以下、二つの場合分けに従って本辞典

9）　*Cassell's New Compact Latin-English/ English-Latin Dictionary*, compiled by D.P.Simpson, Cassell & Co. Ltd, 1963, London; 3rd edition 1966; p.147-r.

10）　nisi の品詞は、辞書によって接続詞か形容詞かに分かれる。たとえば *COD* or *the Concise Oxford Dictionary*, 5th edition, Oxford University Press, 1964, Tokyo; p.815-r は conj.（接続詞）とするが、*Webster's II New Riverside University Dictionary*, the Riverside Publishing Co., Houghton Mifflin Co., 1984, Boston; p.796-l は adj.（形容詞）としている。もしかすると、イギリス流では接続詞、アメリカ流ならば形容詞という相違なのかもしれない。

が「〻」を多用するさまを観察してみよう。念のため、＊を以て二の字点が付いた語の読み方を示し、語によっては／以下に贅言をも付け加えておく。

（ⅰ）訳語中・訳文中の「〻」

実例が多数に上るため、諸相を観察するのに便利な用例にだけ数を絞って示す。

0004-r: about　③…略〻 － The task is about finished. 仕事ハ略〻終ッテヰル ;

＊「略〻」＝ほぼ

0483-r: happen 偶〻… スル

＊「偶〻」＝たまたま

0668-l: more － more and more 益〻, 段々.… － more than ever 益〻, 愈〻.

＊「益〻」＝ますます ;「愈〻」＝いよいよ／「益〻, 段々」によって、「〻」と「々」を使い分けていることがわかる。「益」は一字で「ますます」と読めるが、「段」一字では「ダン」としか読めない。

0711-r: often 屢〻, 往々, …度々.

＊「屢〻」＝しばしば／この「しばしば」という語そのものは、つとに『万葉集』に見えるが、「屢」に二の字点を添えて「しばしば」と読ませるのは、多分に漢文訓読の体裁に基づくものであろう。現在も often の定訳として愛用されている点が興味深い。なお「屢〻」と「往々, …度々」から、やはり「〻」と「々」の使い分けが看て取れる。「屢」は一字で「しばしば」と読めるが、「往」や「度」はそれぞれ一字だけでは「ワウ」「たび」としか読めない。

0874-l: respectively 各〻, 銘々, ソレゾレ

＊「各〻」＝おのおの／同音を反復する訳語が三つ並び、三者三様の表記が見られる面白い項目である。「各」は一字で「おのおの」と読めるが、「銘」一字では「メイ」としか読めない。これまた「〻」と「々」の区別が必要なゆえんである。一方、漢文では「夫」を発語の助字として「それ」と読むことがあるので、そのまま宛字に用いれば「夫々」で「それぞれ」と読ませることは可能だ。しかし、本辞典はそのような宛字表記を嫌ったらしく、律義に「ソレゾレ」と記している。三者三様の表記は、それなりの見識に裏打ちされているわけだ。

0972-r: somewhat　稍〻.

＊「稍〻」＝やや

（ⅱ）説明中の「〻」

この種の「〻」は、説明という字句の役割上、ほぼ「屢〻」に限られるようだ。現行の英和辞典では、それが「しばしば」と仮名書きされているにすぎない。やはり用例数が多いため、四例を挙げるにとどめておく。

0390-r: feeling ③〖屢〻 pl.〗感受性, 感情, ……

0630-l: make ⑥ make + 名詞ハ屢〻ソノ名詞ト同義ノ動詞ニ等シ. 例 : make haste =

hasten; make（an）answer = answer.

1065-r: total　数, 全体, 合計…〖屢ㇾ grand total トイフ〗

1080-l: trousers　ズボン〖屢ㇾ a pair of trousers トシテ用ヒル〗

２）英文訓読流の変則語法

さて、ここで大きく話を翻し、１）（ア）で積み残しにしておいた capacitate の訳語について考察を加えてみよう。便宜上、当該の用例を再掲すれば――

0154-l: capacitate　能ハシメル, 適セシメル

前掲のときにも、前者「能（アタ）ハシメル」に違和感を覚えた向きは少なくなかろうと想像する。後者「適セシメル」について特段の問題は生じない。サ変動詞「適ス」の未然形「適セ」に使役の助動詞「シム」を付けて、さらに「シメル」と口語化しただけの訳語である。

問題となるのは、もっぱら前者「能（アタ）ハシメル」だ。むろん、これとて四段動詞「アタフ」の未然形「アタハ」に使役の助動詞「シム」を付けて、「シメル」と口語化したにすぎず、文法上は何も取り立てて論じるには及ぶまい。しかし、文法上は問題ナシでも、用法の観点に立てば、首をかしげざるを得ないはずである。なぜなら、「アタフ」は、文語の時代から、打消表現に用いられるのが通り相場だからだ。具体的には、打消の助動詞「ズ」を伴い、「（～ニ／～スル〔コト〕）アタハズ」のごとく用いる語なのである。漢文訓読の場でも「不レ能ハレ Vスル（コト）」（Vスル〔コト〕）能（アタ）ハズ）と訓ずるのが通例だ。否定辞「不」を冠せられることなく単独で「能」が記されているときは、「アタフ」とは読まず、「能ク Vス」（能（ヨ）クVス）と副詞に訓ずる習慣である。要するに、「アタフ」は、未然形「アタハ」に打消の助動詞「ズ」が付いた「アタハズ」という形でしか現れない変則的な動詞にほかならず、融通の利かぬこと甚だしい。使役の助動詞「シム」は未然形に接続するからといって、「アタハシメル」などという珍奇な言い回しを編み出されては困るのだ。

しかし、本辞典は現に「能ハシメル」と記している。それも、訳語の末尾におずおず添えるのではなく、堂々と訳語の先頭に掲げている。それなりの背景があるものと考えざるを得まい。

手続きとして、まずは意味上 capacitate と類縁関係にある単語の訳語に「能フ」が見えることを確認しておく。capacitate の訳語「能ハシメル」が決して偶然の産物ではなく、いわば確信犯であることをたしかめるためだ。

0151-l: can ①出来ル, 能フ, ナシ得ル.

0154-l: capable ①能力ノアル, 出来ル, 能フ ; … シ得ル ; … サレ易イ.

0792-r: possible　－ if possible 能フベクバ, 出来ルコトナラ.

漢文訓読式の「能ク」が見当たらず、その代わりに「能フ」を連発している。本辞典が可能を表す定訳として「能フ」を用いていることは明らかだろう。if possible の訳語「能フベクバ」を見れば、打消の助動詞「ず」なぞものかは、推量の助動詞「べし」を伴って使う場合

もあるのだとわかる。どうやら打消の語脈に限ることなく、自由に「能フ」を用いるつもりらしいのである。

では、打消「ず」から解放された「能フ」の用法は、いったい何に由来するのか。どこから「能フ」の変則的な使い方が生じたのだろうか。

想うに、この「能フ」の放肆な用法は、英文訓読に由来するもので、can に対して機械的に訳語「能フ」を当てはめ、無理を承知で前後の訳語と結合したために生じた用法なのではないか。ただちに西山義行［訳］『ウヰルソン氏第二リードル 独案内』から実例を示せば、以下のような具合だ。[11)]

まずは can が否定された can not の例を観ておこう。この『ウヰルソン氏第二リードル 独案内』は can と not をつなげて cannot とは綴らず、必ず二語を切り離して can not と表記している。

Can not you tell a whip from a doll?（p.2）
＝汝ハ人形カラ鞭ヲ話シ能ハヌカ。

意味不明の訳文である。tell が distinguish と同義になる表現 tell A from B を見落としたがゆえの誤りとしか思えないが、たとえその言い回しに適うように訳したとしても、「鞭を人形と区別できないのですか」では、やはり何が言いたいのやら意味不明に近いだろう。しかし、ここで解釈に拘る必要はない。注意すべきは、「能フ」がどのように前後の単語と結びついているかである。

「話シ能ハヌ」――前方の「話シ」は四段動詞「話ス」の連用形、そして「能フ」の未然形「能ハ」に打消の助動詞「ズ」の連体形「ヌ」が接続している。「能フ」が打消の助動詞「ズ」を伴うのは定石どおりだが、それに先立つのが連用形「話シ」とは変則そのものである。「能フ」が「～できる」意のときは漢文訓読で常用されるごとく「～スル（コト）能ハズ」と、また一般の古文でも「～にふさわしい」意ならば「～ニ能ハズ」と用いるのが通例だからだ。形式名詞「コト」がなく、「コト」を省いた連体形でもなく、はたまた助詞「ニ」もなく、連用形に「能ハズ」が直結するのは、無骨の域を通り越して、明らかに文語文法を踏みにじった強引な言い回しである。

この強引さは、can not の not がない肯定文では、さらに無理の度合いを増す。連用形に「能フ」が接続するばかりか、打消の助動詞「ズ」を伴わずに「能フ」が用いられるからだ。前方のみならず、後方に対しても不義理を犯す使い方である。論より証拠、次の諸例を見ていただきたい。

Can you make a hood, or a bonnet for her, and little shoes for her feet?（p.4）
＝汝ハ彼女ノ為ニ帽子即チ被リ物ト、而シテ彼女ノ足ノ為ニ小サキ沓ヲナシ能ウカ。

11）　注3同書。例文それぞれの末尾に所載ページ数を添えてゆく。“can ＝能フ”の用例は多数に上るため、今 LESSONS Ⅰ - Ⅸ（第一～九章）pp.1-25に見える用例のみに限定する。ただし、注3に相当する例文で示した訳語の並べ順を示す漢数字の番号は煩を避けて省略に従い、その順序どおりに訳語を並べた訳文を掲げる。訳文には句読点その他を加えて、読みやすさの便宜を図った。なお、注3の例文と同じく、発音を示す片仮名もすべて省略する。

A duck has large and broad feet, so that it can swim well.（p.11）
　＝鶩ガ大ナル而シテ広キ足ヲ持テリ、ソレユヘニ其レガヨク泳ギ能ウ。
I can see one of them.（p.13）
　＝私ハ彼等ノヒトツヲ見能ウ。
Can he pull him out?（p.16）
　＝彼ガ彼ヲ引キダシ能ウカ。
You can see that he thinks so.（p.17）
　＝汝ハ彼ガ左様ニ考ヘルト言フコトヲ見能ウ。
Can she keep up now?（p.21）
　＝彼女ガ今続キ能ウカ。
Can you tell? How can you tell?（pp.22-23）
　＝汝ハ話シ能ウカ。汝ハ如何ニ話シ能ウカ。
Can you ride on a horse?（p.25）
　＝汝ハ馬ニ乗リ能ウカ。

いずれも「動詞の連用形＋能ウ」の形を取っている。これは can が過去形 could になっても変わらない。

Could you walk so fast?（p.20）
　＝汝ハ左様速カニ歩ミ能ウカ。

さらに言っておくと、すでにお気づきのとおり、can not ならば「能ハヌ」とハ行に活用していながら、単に can となると「能ウ」のごとくア行かワ行に活用するという放埒ぶりだ。当時の用字感覚（と私が想像するもの）から考えて、また「能ハヌ」の「ハ」の音価が「ワ」であることに鑑みても、たぶんワ行「ウ」のつもりだったのではないかと推測するが。この仮名遣いの揺れが露わになるのは、肯定 can と否定 can not の両者が同時に現れる以下のような訳文においてである。煩を避けて、例文は二つに絞っておく。第二例は、対話型の例文である。

Can you tell me why a doll can not be cold?（p.4）
　＝汝ハナゼ人形ハ寒クアリ能ハヌカヲ私ニ話シ能ウカ。
Can you hear the drum?　O no, I can not hear it.（p.5）
　＝汝ハ太鼓ヲ聞キ能ウカ。　オー否，私ハ其レヲキヽ能ハヌ。

もっとも、「能ハヌ」ではハ行、「能ウ」ではワ行（ア行？）に固定されているかというと、必ずしも然らず。なぜか急にハ行に統一されることもある。一つだけ対話型の例文を挙げておこう。

Can you see both of his hands?　No; I can see his right hand, but I can not see his left hand.

（p.24）
＝汝ハ彼ノ手ノ両方ヲ見能フカ。　否、私ハ彼ノ右ノ手ヲ見能フ、併シナガラ私ハ彼ノ左ノ手ヲ見能ハヌ。

歴史的仮名遣いが未だ定着していなかった明治16年（1883）当時の仮名遣いとは、このようなありさまであった。

以上のごとき英文訓読の実態を踏まえれば、本辞典が“capacitate ＝能ハシメル”“can, capable ＝能フ”“if possible ＝能フベクバ”のような訳語を掲げた理由がわかるのではないか。どう見ても不自然な用法の「能フ」は、英文訓読の場では可能を表す訳語として大活躍していたのである。

本辞典は英語を専門とする学者たちが作ったのだから、文語「アタフ」の用法に通じていなかったのだろうと踏み倒すのは的外れで、むしろ話は逆ではないか。英語の専門家だからこそ、若いころ慣れ親しんだ英文訓読の影響が脳裡に巣くい続けていたがゆえに、平気で“capacitate ＝能ハシメル”のごとき訳語を記したものと推測する。あくまで推測の域にとどまるとはいえ、おそらくは中（あた）らずと雖も遠からずに違いない。

３）候文風の宛字

本辞典の訳語には、今日ほとんど見かけなくなった宛字も登場する。宛字は単なる宛字と看做して素通りすることもできるが、その背景には、昭和13年（1938）当時、なおも命脈を保っていた候文が存在していたのではなかろうか。候文には何かと宛字が目立つからである。

0355-l: entreat　－ entreat one to〔do〕某ニ… シテ呉レト頼ム

「呉」に送り仮名「レ」を付けている以上、仮名で「クレ」と表記するのと字数に違いはない。それを敢えて「呉レ」としたのは、江戸時代後期以降、動詞「クレル」を「呉（レ）ル」と表記することが多くなっていた候文の影響ではないだろうか。

0418-r: force[2]　－ force the bidding　直段ヲドンドンセリ上ゲル〔競売デ〕.

一見「直段」は誤植で、正しくは「値段」だろうと思うかもしれないが、「値」のニンベン「亻」を略して省体「直」に作るのは、候文で多用される字遣いだ。純粋な宛字とは言えないが、一種の宛字と看做して、ここに掲げておく。

0523-r: ill[2]　－ I can ill afford it. ソレハ出来兼ネル.

この「兼ネル」という表記も、候文の定型表現「致兼候（イタシカネサウラフ）」などに見える「兼」をそのまま持ち込んだ宛字であろう。

0621-l: love[1]　－ give love to ニ宜敷ク言フ. － send one's love to ニ宜敷クト伝言スル.

形容詞シク活用の活用語尾中、連用形「シク」・連体形「シキ」の宛字として、候文では「敷」が愛用される。この love に係る二例は、いずれも連用形「シク」の宛字。

0688-l: nevertheless　サリナガラ

すべて仮名書きされており、宛字は見当たらない。しかし、この「サリナガラ」は、候文で常用される「乍去（サリナガラ）」（乍ラ㇀去リ）を仮名書きした訳語であろう。本来は「然（サ）リナガラ」と表記すべき語で、「乍」も「去」も宛字。背後に宛字が透けて見える例と看做し、ここに挙げておく。

0845-r: rate　－ at any rate 兎ニ角

やはり候文で用いられる「兎ニ角」は、宛字の代表格と言ってよいだろう。この世にあり得ないものを意味する仏教語「亀毛兎角（キ マウ ト カク）」（カメの毛とウサギの角（ツノ））に由来する宛字とされるが、日本語「トニカク」の意味とはまったく無関係な二字である。

1168-r: yet ⑧... 併シ乍ラ.　－ but yet ... ソレデモ矢張.

「併シ乍ラ」は、上掲「乍去（サリナガラ）」と同じく、候文で頻用される「乍併（シカシナガラ）」（乍ラ㇀併シ）を取り来たって、日本語の語順に改めた訳語である。前（さき）に引いた英文訓読の訳文にも but を「併シナガラ」と訳している例があった（『ウヰルソン氏第二リードル 独案内』p.24）。また「矢張」は、上記「兎ニ角」と並ぶ宛字の代表格で、やはり候文で愛用される宛字である。

４）古風な表記・訳語・訳文

（ア）古風な表記

今は「しあわせ」を漢字で記すとなれば、誰もが「幸せ」と書くだろう。けれども、かつては「仕合（は）せ」が標準の表記で、本辞典も例に漏れない。

0151-l: can　－ as ...as can be: 頗ル... デアル［He is as happy as can be. 頗ル仕合ハセダ］.

もちろん happy にも同じ表記が見える。

0483-r: happy　幸福ナ, 仕合セナ

「幸福ナ」は「幸福（シアハセ）ナ」と読めなくもないが、直後の「仕合セナ」と重複してしまうので、やはり「幸福（カウフク）ナ」と音読みしているのだろう。

（イ）古風な訳語

言葉の移り変わりは激しいもので、なかんづく物・事の呼び方は時代とともに変化する。次の訳文に見える「合間（アヒマ）仕事」も一例に数えられよう。

0340-r: eke　－ eke out one's salary with odd jobs アヒマ仕事ヲシテ給料ノ足シニスル.

今の若者たちならば「アヒマ仕事」とは言わず、「すきまバイト」と呼ぶのがふつうだろう。若者でなければ「臨時仕事」か、せいぜい「半端（はんぱ）仕事」くらいか。「片手間仕事」では、少し意味合いがずれてしまう気がする。

0482-l: handkerchief　はんけち

実のところ、この「はんけち」を古風な訳語と称するにはためらいを覚える。というのも、ふだん私（古田島）は文字どおり「ハンケチ」と呼んでいるからだ。自分では古風な呼び方とは思っていない。けれども、某女子短期大学に出講していたとき、授業中に「ハンケチ」と言ったところ、学生たちが「ハンケチぃ？」と小馬鹿にしたように失笑した。聞けば、「ハンカチ」とは言うが、「ハンケチ」は口にしたことがないとの由。どうやら「ハンケチ」は、いつのまにか古臭いオジサン用語になってしまったようだ。もしかすると女子学生の耳には「半吝（ハンケチ）」のごとく響くのかもしれない。それでも私は相変わらず「ハンケチ」と呼び続けているが。

次例は、打って変わって少しく高級な話である。

0614-l: living　－ living Buddha　活仏（ゲンダ）［蒙古ノ］

現在「活仏」とあれば、誰もが「カ（クヮ）ツブツ」と音読みし、まず例外はないだろう。けれども、本辞典の読み「ゲゲン」は、その（たぶん稀少そのものの）例外なのである。「活仏」すなわち生き仏と来れば、チベット仏教で観音菩薩の化身とされるダライ - ラマや阿弥陀如来の化身とされるパンチェン - ラマが連想されるが、チベット仏教を信仰するモンゴル人のあいだでは、観音菩薩の化身とされる活仏＝ゲゲンが人々の崇敬を集めている。これが［蒙古（モンゴル）ノ］との条件付きで「活仏」を「ゲゲン」と読む根拠だ[12]。チベット仏教そのものの活仏＝ラマではなく、チベット仏教を奉じるモンゴル人の活仏＝ゲゲンを持ち出したのは、1911年、中国の辛亥革命に乗じて、外モンゴルが活仏ボグド・ゲゲンを推戴して独立を宣言し、1921年のモンゴル革命を経て、1924年にモンゴル人民共和国が成立したという国際情勢、および1932年に建てられた満洲国のスローガン「五族協和」（日・満・蒙・漢・朝）の影響などにより、些少ともモンゴル人社会に対する関心が高まっていたからかもしれない。あるいは、

12）　ゲゲンについて、詳しくはナムジャウ「活仏の世俗的訓話とその役割――ホボクサイル・モンゴル社会におけるシャリワン・ゲゲン十四世の事例に注目して――」総研大文化科学研究第11号（2015）pp.97-117などを参照のこと。同論文pp.103-r-104-lによれば、ゲゲンとは、もと「修業を積んで成仏した人」を指し、その人物が亡くなった後、引き続き「一切の衆生を救済するために、再び人間界に…人間の肉体のすがたをとって現れる」という。

大ベストセラーになったという小谷部全一郎『成吉思汗ハ源義経也』（冨山房、1924）のような俗書もモンゴル人への親近感を養うのに与っていたであろうか。

それにしても隔世の感を抱くのはpopcornの訳語である。今日ならば音写「ポップコーン」の一点張り、それ以外の訳語は思いつくまい。しかし、本辞典は違う。

0789-r: popcorn　ハジケ玉蜀黍

トウモロコシの表記「玉蜀黍」がいかにも古めかしいが、製法そのままに「ハジケ玉蜀黍」と呼んでいる点には滑稽味さえ感じるだろう。逆に言えば、「ポップコーン」という響きが我々の耳にどれほど深く馴染んだかがわかるのである。

末尾に挙げる例は、おそらく死語と化した訳語である。

0805-r: pretty-pretty n.[pl.] 飾リ, ヤスピカ物

ぴかぴか光っているだけが取り柄の安っぽい飾り物を指す俗語だろう。「安ぴか物」と聞けば、意味は見当がつく。けれども、実際に耳にした記憶はない。「ハジケ玉蜀黍」が現代の語彙に復活するとは想えないし、復活させようとも思わない。しかし、この「安ぴか物」は、なかなか言い得て妙な日本語ではなかろうか。使える機会があれば使ってみたい一語である。[13)]

（ウ）古風な訳文

最後に、古めかしい訳文が漢文訓読調に限らないことを示す例を一つ掲げてみよう。「何もそんな言葉遣いをしなくても」と言いたくなるような字句が記されている。

0724-l: ought　− It ought to have been done long ago. トックニ済ンデヰル筈ダッタノニ〔済マヌトハ不届至極〕.

過去を表すべくoughtに完了形不定詞の付いた例文だが、訳文末尾の〔　〕内に見える「不届至極」がいかにも時代がかっていて面白い。いわゆる時代劇で少なからず耳にする「お上を畏れぬ不届き者めが！」との科白が連想され、ほとんど冗談かと疑うような訳文である。辞典に用いる言葉遣いとしては不適切だとの批判もあるだろう。けれども、単に「怪しからん」などと訳すよりも、はるかに気の利いた言い回しかと思う。

ただし「不届至極」を無条件に面白がってもいられまい。なぜなら、かつては夜八時台を中心に必ずどこかの民放テレビ局で放映されていた時代劇の番組が近年ほぼ一掃されてしまったからだ。若い世代が時代劇の科白に馴染む機会はなくなり、そもそもテレビを視る若者の

13）　最近はランドセルの売り込み文句に「安ピカッ」の語が使われているようだ。ピカッと輝いて見えるので遠方からも視認しやすく、学童の安心・安全が確保できるとの意味らしい。つまり「安ぴか」と訓ずれば貶義となるが、「安ピカ」と読めば褒義になるわけである。もし貶義の訓読み「安ぴか」の「安」字を音読み「安」に変装させ、以て褒義「安ピカ」に変化させたのであれば、旧語を踏まえた新語の生成例として記憶に値するだろう。その可能性は低いと思うけれども。

人数さえ激減、視るのはYouTubeのお気に入り動画ばかりとなれば、遠からず「不届至極」は理解不能どころか読むことすらできない謎の漢字語に成り下がってしまうのではないか。漢文訓読を手放し、時代劇の科白さえ失い、日本語は痩せ細ってゆく一方である。

【D】特殊語彙の採録

本辞典は小型の英和辞典のため、収録語数には自ずから限界がある。しかし、わずかに一つとはいえ、現行の英和辞典ではついぞ見かけない項目が目にとまったので、それを書き留めておこう。

0145-l: cabal　－ cabal system 諸語ノ頭字ヲ連接シ一語トシテ全体ヲ記憶スル法.

英語の記憶術に些少とも関心があれば、すぐ具体例に想い到るだろう。たとえば、五大湖すなわちSuperior, Michigan, Huron, Erie, Ontarioの頭文字S, M, H, E, Oを組み合わせ、HOMESと一語にして記憶する方法だ。七つの等位接続詞もFAN BOYSと覚えておけば、for, and, nor, but, or, yet, soを記憶のなかから取り出せるとの寸法である。[14]

ただし、こうした記憶術は、単語それ自体ではなく、あくまで頭文字を釣り針にして単語の全体を釣り上げる方法にほかならず、相応の知識が前提条件となる。もし五大湖の名を五つとも正確に知らなければ、HOMESは記憶法として機能せず、最悪の場合は「家々」の意味にしか響かないだろう。FAN BOYSにしても、forに前置詞のみならず、接続詞の用法もあることを認識していなければ、自信を以てFをforに変換できまい。また、相関語句neither...nor...を記憶しているだけでは、Nをneitherと取り違えるおそれもある。neitherは副詞、norが接続詞との知識を欠いていては、やはりNを正しくnorとは復元できない。率直なところ、それほど優れた記憶術とは言えないと思う。

けれども、記憶術としての優劣はさておき、私にとってはcabal systemという名称そのものが有り難かった。というのも、西洋の記憶術に関する英文の書物を翻訳して以来[15]、上述のような頭文字を結合して一語に仕立てる記憶法を何と呼ぶのか、長いあいだ調べあぐねていたからである。近年になってWEB上の検索その他により、上記のHOMESやFAN BOYSなどは頭（文）字語acronymと呼び、それを用いた記憶術はacronymismと称するらしいとの見当はついたものの、どうにも末尾の-ismが雅で抽象的すぎて、私が抱いている印象にそぐわない。もう少し俗で具体的なイメージの名称はないかと探し求めていたところ、このたび本辞典で偶然cabal systemに出逢ったわけである。

名称に冠せられたcabal自体が頭字語で、チャールズ２世（在位1650-85）が1672年に設置した外務委員会の有力者五名すなわちClifford, Arlington, Buckingham, Ashley, Lauderdaleの頭文字を取ったものだという。この五名を中心に組織されたthe Cabal（カバル内閣1667-73）

14）　英語の記憶術については、友清理士『英語のニーモニック ～円周率から歴史年号・イギリス王室まで 覚え歌大集合』（研究社、2001年）を参照。p.10に五大湖HOMESが、p.189に等位接続詞FAN BOYSが見える。
15）　ジョナサン・スペンス『マッテオ・リッチ　記憶の宮殿』（拙訳、平凡社、1995年）。この一書は、位置づけ記憶法について詳しい。

は、近代の内閣の前身とされるが、外交上の密約をはじめとする数々の陰謀事件を惹き起こした。

ただし、「陰謀（に加わる）、徒党（を組む）」意の cabal を五人の名の頭字語とするのは俗説にすぎないようだ。この cabal は、もと中世ラテン語 cabala がフランス語を経由して英語に入り込んだ語で、すでに1646年以降に用例が見えるとの由である[16)]。しかし、その俗説を前提として cabal system という呼び名が成り立ったことは事実だろう。頭字語を用いる記憶術の名称に頭字語が紛れ込んでいるとなれば、それこそ記憶しやすい呼び名ではなかろうか。本辞典が cabal system を立項してくれたことに満腔の謝意を表したく思う。その裏には、日本で時に湧き起こっていた記憶術ブームが与っていたのかもしれない。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

以上、長々と本辞典の諸相を論じてきた。文語体と口語体との絡み合い、平仮名と片仮名の逆転現象、仮名遣いの微妙な違和感、康熙字典体の保持、括弧内に読み仮名を記すさいの縦書き感覚、漢文訓読式の表現、出典の漢文を意識した漢字遣いや出典の漢文を書き下しただけの訳文、二の字点「〻」の多用、「能（アタ）フ」に関する英文訓読流の変則語法、候文風の宛字、古風な表記・訳語・訳文、そして現行の英和辞典では立項されていない記憶術の名称など、勝手気ままに並べ立てただけでも、日本語の来し方行く末を観察すべく、実に豊富な資料を提供してくれる。

古辞書と言えば、一般には『新撰字鏡』『倭名類聚抄』などの漢和辞典・国語辞典が連想されるだろう。たしかに、日本人と漢籍との長きにわたる付き合いの歴史や脈々と承け継がれてきた日本語の歴史に想いを致せば、平安～江戸時代の漢和辞典・国語辞典の類を古辞書と呼ぶことの不当ならざるべきを思う。しかし、そうだとすれば、明治維新以来の西欧語との付き合いの歴史についても、すでに相応の年数を経ている以上、第二次世界大戦の終結すなわち昭和20年（1945）を新旧の境界として、英和辞典をはじめとする戦前の西欧語の辞典類も古辞書と総称することが許されるのではなかろうか。いわば「新しい古辞書」であり、それを研究する学問が「新・古辞書学」だ。昭和13年（1938）の英和辞典を論じた本稿に何ほどかの学術的意義があるとすれば、「新・古辞書学」の成立もまんざら掛け声倒れにはなるまい。

最後に、本辞典が刊行されたころの世相を反映している一文を挙げることとしたい。今日に生きる我々にとっては、何とも不思議な、いや、異様な内容だ。

0697-r: not　－ The Russians will not fight, not they. ろしや人ハ戦争シナイ、決シテシナイ.

この一文は〖not ノ位置〗の説明中、「（b）分詞、不定法其他ノ品詞ヲ否定スル場合ニハ其ノ前ニ用ヒル」の実例として記されている。直前の（a）で...will not fight... の not の位置については、「助動詞＋本動詞ノ場合ハ両者ノ間」と説明を終えているので、上例の眼目が not they にあることはたしかだろう。代名詞 they の前に not を置いて否定している語順に注意を促そ

16）　*COD* 注10同書；p.165-l: cabal...[f. F cabale(r) f. med L cabala; not f. initials of Clifford etc., being quoted from 1646].

うとする例文である。

けれども、その程度の語順を確認させるために、ことさら The Russians を主語に立てる必要は毫もあるまい。“They will not join the plot, not they.” =「彼ラハソノ陰謀ニ加担シナイ、決シテシナイ」くらいの中立的（ニュートラル）な例文で十分なはずだ。なぜ The Russians を持ち出して「戦争」云々のごとき不穏当にも響く用例を掲げたのか。

按ずるに、この例文の背景には、当時の知識人たちのあいだに広まっていたマルクス＝レーニン主義の本家としてのソ連に対する盲目的な信頼が存在するのだろう。今日の我々ならば、時のソ連に君臨していた指導者スターリン（1879-1953）が一国社会主義論を唱えて推進した暴政の数々を知っている。しかし、日本の知識人たちは、その暴政を知ってか知らずか、もしくは社会主義や共産主義の理論そのものが間違っているわけではないとの考えにしがみついていたのか、一言以て之を蔽えば「左翼思想に甘かった」のである。

戦前の日本は皇国思想で塗り潰され、特高警察（1911-45）や治安維持法（1925-45）によって社会主義運動や共産主義活動が徹底的に弾圧されたとのイメージが強いが、実際に弾圧の対象となったのは日本共産党（1922-）や無政府主義者の類であり、マルクス主義者またはその信奉者との理由だけで知識人や一般人・学生までが取り締まりの対象になったわけではない。これまた政権側にも「左翼思想に甘かった」側面がある。現に上掲のような例文が本辞典のごとき英和辞典にも忍び込んでいたのが事実だ。本辞典が載録している“0900-r: Russophobia ろしや恐怖, 恐露病.”にも相通ずる気配を感じるのだが、果たして私の考えすぎだろうか。

それにしても、と思う。1932-33年、ソ連の失政・暴政によってウクライナを中心に惹き起こされた大飢饉すなわちホロドモールは徹底して隠蔽が図られたため、本辞典の編纂者・執筆者たちが知らなかったのも無理はない。そして、本辞典が刊行された1938年までにソ連が目立つ対外戦争を行わなかったのも事実である。しかし、その後、ソ連は1939年にフィンランドへ侵攻、第二次世界大戦が終わった1945年には満洲・朝鮮・北方領土へ侵攻、1956年にはハンガリーへ侵攻してハンガリー動乱を鎮圧、1968年には「プラハの春」を叩き潰すべくチェコスロヴァキアへ侵攻、そして1979年にはアフガニスタンへ侵攻……枚挙に遑がないほどの侵攻続きだ。こうした侵攻事件はソ連が惹き起こしたもので、ソ連とロシアは別物だと言うかもしれない。だが、1991年のソ連崩壊後も、ロシアは2014年のウクライナ「マイダン革命」に介入して強引にクリミアを自国へ編入し、あろうことか2022年2月24日には隣国ウクライナへの侵攻を開始、本稿を執筆している時点（2024年1月25日）でもロシアが仕掛けたウクライナ戦争は終結の端緒さえ見通せないありさまだ。「ろしや人ハ戦争ヲヤメナイ、決シテヤメナイ.」こそ史実に沿った一文であろう。

本辞典が刊行された1938年は、ソ連がフィンランドへ侵攻した1939年の前年に当たる。折しも1939年に亡くなった本辞典の編者・石川林四郎にとっては、勿怪の幸いだったのかもしれない。